

ムガル帝国におけるバフシ職について

—大バフシ職の運用における人的要因—

真 下 裕 之

はじめに

- 1 ムガル帝国におけるバフシ職全般
 - 1.1 呼称の定義
 - 1.2 大バフシの職務
 - 1.3 その他のバフシ職
 - 2 大バフシ職就任者の一覧
 - 2.1 大バフシ職の定員
 - 2.2 「御前のバフシ」, 「宮廷のバフシ」
 - 3 大バフシ職の運用における人的要因
 - 3.1 大バフシ職就任とマンサブとの関係
 - 3.2 大バフシ職就任者たちの職歴
 - 3.3 大バフシ職就任者たちの親族関係
- おわりに

はじめに

1980年代以降しばらくの間、インド史におけるムガル帝国の位置づけが学界の重要な論点となったことがある。この問題提起を行ったのはおもに、18世紀以降ムガル帝国の政治的解体に伴って各地方に登場した後継諸国家を専門とする研究者たちであった⁽¹⁾。多岐にわたるその論点の一つは、ムガル帝国の中央集権性に対する疑義であった。

(1) 代表的な論著は [Bayly 1983], [Perlin 1983], [Perlin 1985], [Alam 1986], [Wink 1986], [Marshall 1987], [Washbrook 1988], [Subrahmanyam & Bayly 1988] など。

君主を中心にして高度に集権化されたその国制が、農業制度の危機とジャーギール制度の危機に直面して18世紀初頭までに崩壊したという従来説の図式に立つならば、インド史上の18世紀はその後の植民地時代を導く、混乱と停滞の時代であったことになる⁽²⁾。これに対して彼らの研究は、各々の地方社会における商業活動の発展を明らかにし、18世紀においてインドの社会経済がむしろ活況を呈していたことを重視した。そうであるなら、帝国の崩壊は社会の停滞を導かなかったことになるから、それまで地方社会を覆っていたという帝国支配の強度や画一性そのものが疑われることになる。Alam と Subrahmanyam の言葉を借りれば、帝国の実態は「床一面のカーペット」というより「パッチワークのキルト」ではなかったか、という問いが投げかけられたわけである [Alam & Subrahmanyam 1998: 57]。

これに対してムガル帝国史を専門とする従来説の研究者たちは、この問題提起を「修正主義」と呼び、反論を提出した⁽³⁾。しかし「修正主義」者たちはもとよりムガル帝国の史料に通じた専門家ではなかったから、この論争が帝国国制の実証的な再検討にまで及ぶことはなかった。そして1990年代末以降、ムガル帝国の歴史研究が文化史的な諸側面に重心を移すにつれ、この問題は十分に議論されることなく現在に至っている⁽⁴⁾。

もちろん「修正主義」からの問いに、従来説の準備が皆無だったわけではない。むしろこの論争が生じるまでに、ムガル帝国の制度史研究は、農業経済に関する Habib の研究をはじめとして、社会経済史の分野を中心に大きな進歩

-
- (2) 二つの危機について詳しくは、[Habib 1963: 317-351], [Chandra 1982], [Moosvi 1985] を見よ。
- (3) とくにインドの研究者を中心とする従来説からの反論は [Athar Ali 1986/7], [Athar Ali 1993]。またインド洋におけるインド商人の貿易活動についても、18世紀に衰退が見られたとする説が有力であることに関しては、さしあたり [長島 2000: 161-163] を見よ。
- (4) 18世紀の位置づけ、ひいてはムガル帝国時代の位置づけをめぐる一連の議論とそのインパクトについては、[Subrahmanyam 1992] および [Alam & Subrahmanyam 1998] の序文が手際の良い整理になっている。関連する論文の集録が [Alam & Subrahmanyam 1998] のほか [Barnett 1999], [Marshall 2003], [Alavi 2003]。その他参考になるのは [Hintze 1997], [中里 1999], [水島 2006]。

を見ていた [Habib 1963]。ところが帝国の国制そのものについては、20世紀前半に Ibn Hasan によって制度の骨格が記述された後、Qureshi と Richards による部分的な貢献を別とすれば、ほとんど研究の進展がなかった ([Ibn Hasan 1936]; [Qureshi 1973]; [Richards 1975]; [Richards 1986])。とくに、そのような骨格のもとで帝国の制度が実際どのように運用されていたのか、という「修正主義」者の問題提起に答えるだけの知見は、いまなお乏しいままなのである。

以上のような問題意識のもと本論は、ムガル帝国国制の軍務部門を担っていたバフシ *bahṣī* 職、なかんずく中央政府においてその筆頭にあった大バフシ職の運用の実態を、就任者の職歴や親族関係といった人的要因から明らかにしようとするものである。

ムガル帝国における人材運用の問題はもちろん、マンサブ制度との関連から貴族研究の一部として取り組まれてきたテーマではある。とくに Athar Ali の任官者総覧は貴族研究の網羅的な基礎データを提供したものであり、史料批判の不全や細部の錯誤など問題はあるものの、本論を含めその後の研究に裨益するところは大きい [Athar Ali 1985]。しかし従来の貴族研究はおおむね、「イラン系」「インド・ムスリム」などの「民族・宗教集団」からなる貴族層の「構成」の動態を保有マンサブ総数の多寡から導こうとする数量研究⁽⁵⁾か、個別の有力家系の消長を記述する事例研究⁽⁶⁾に終始してきた。それゆえ国制の運用とこれを担った人材としての貴族層との関係という問題意識は希薄であった。本論は従って、貴族研究のこのような欠落を補うことも目指している。

さて、ムガル帝国の国制は、財務、宮内、宗務、軍務の4つの部門から成り立っており、それぞれの部門は官庁 (*daftar*) を備え、それぞれに長官職が置かれていた。史料上の用語は、財務長官が *dīwān* ないし *wazīr*、宮内長官が *mīr sāmān* ないし *ḥān sāmān*、宗務長官は *ṣadr al-ṣudūr* であり、軍務長官である大バフシに相当する用語は後述するとおり多数ある。

(5) この手法によってアウランゼーブ時代の貴族層を研究した成果が [Athar Ali 1966]。この手法をそのままシャー・ジャハーン時代に用いたのが [Anwar 2001] である。

(6) 代表的な成果は [Habib 1969], [Husain 1999] である。

このような国制の姿は、ムガル帝国の祖であるティムール朝の影響を濃厚にうかがわせる〔久保 1997〕。たしかにバフシという身分およびバフシ職はムガル帝国に先行するデリー・スルターン朝時代の史料にはいっさい在証されないから、その起源はティムール朝に求めるべきだろう。とはいえ軍務庁の書記官職としてむしろ下層に位置していたティムール朝時代のバフシ職と、ムガル帝国におけるそれとの間にはかなりの開きがある。またティムール朝時代のバフシがまとっていたトルコ語文語の担い手という文化史的な意味合いは、ペルシア語文語が卓越するムガル帝国の環境のなかで完全に脱色されている⁽⁷⁾。

ムガル帝国において大バフシ職が存在感を放つのは、同職が、1573/4年に導入されたマンサブ制度の要であったためである。この制度は、マンサブ保有者（マンサブダール）に兵備の維持という軍事上の義務を課すものであった。この義務に対応してマンサブダールに割り当てられた俸給の総額は、帝国の歳入額の8割を超えていたという試算がある〔Moosvi 1987: 270〕。帝国の奉職者の多くはマンサブを授与されることによって、その職務の内容にかかわらず、俸給制度上は軍人の身分にあった⁽⁸⁾。この点において、大バフシ職は、軍務部門の筆頭にあることによって、帝国人士の大半の俸給を統御する機能を果たしていたことになる。それゆえ同職は、帝国の俸給制度と貴族制度の両側面を有して、帝国の人事の大半を覆っていたマンサブ制度、ひいては国制全体を理解する上で何より重要な鍵であると考えられるのである。

以下、本論では、(1)ムガル帝国におけるバフシ職全般を概観することによって国制における大バフシ職の位置を確認し、(2)同職就任者の一覧を作成するための考証を開示したうえで、(3)就任者のマンサブ、職歴、親族関係という、同職の運用における人的要因を分析する。検討の対象とする期間は、マンサブ制度が導入された1573/4年以降アウラングゼーブの死去（1707年）までとする。同職が国制において重い意味を持ったのはマンサブ制度ゆえだからであり、ま

(7) バフシという身分およびバフシ職についての通史的記述は〔Köplülü 1942〕。ティムール朝時代のバフシについては〔Esin 1970〕,〔Esin 1979〕,および〔Ando 1992: 234〕。

(8) 職務上、軍事とは関連のない宗務長官（*şadr al-şudūr*）や文人などがマンサブを授与された例が数多くある。

たその国制が働いていた帝国が体をなしていたのは通常、アウラングゼーブ時代までと考えられるからである。

なお本論においては、年代を西暦に換算して叙述する。これは、以下のごとくムガル帝国時代に様々な年号表示が行われたため、研究上、何らかの標準化を要するからである。諸史料においてはヒジュラ暦の他に、「治世第～年」のごとく、君主の即位した年を第1年とする年号表示が用いられている。そのさい用いられた暦法は時代によって異なり、春分始まりのイラン太陽暦が用いられた時代（アクバル時代、ジャハーンギール時代）と、君主の即位したヒジュラ暦月朔日を元日としてヒジュラ暦が用いられた時代がある（シャー・ジャハーンの治世各年の元日はジュマダー・アッサーニー月朔日、アウラングゼーブのそれはラマダーン月朔日である）。

1 ムガル帝国におけるバフシ職全般

本論における議論の対象は、ムガル帝国中央政府の軍務部門を統轄する大バフシ職である。本節では、後続する議論の前提とするため、(1)本論におけるこのバフシ職の呼称を定義し、(2)同バフシ職の職務を概観し、(3)ムガル帝国に置かれていたその他のバフシ職について簡潔に記述することによって、同バフシ職の位置づけを明確にする。

1.1 呼称の定義

従来研究では、帝国行政の軍務部門のトップに位置するこのバフシに、史料上の呼称でもある「ミール・バフシ」*mīr baḥṣī*（筆頭バフシ）という名称を与えるのが普通である。しかし本論の論述ではこの名称を、総称としては用いない。というのも、ミール・バフシが二つの意味を持つために、本論の研究においては混乱を来すからである。後述するとおりこのバフシ職の定員は複数であったと考えられるのであるが、ジャハーンギール時代までは各々を区別せず呼称していた。これがミール・バフシという名称の一つめの意味である。一方、同職にはシャー・ジャハーン時代以降、第1バフシ (*baḥṣī-i awwal*) と第2バ

フシ (baḥṣī-i duwwum) に、さらにアウラングゼーブ時代には第3バフシ (baḥṣī-i siwwum) にまで、分化と序列化が生じた⁽⁹⁾。そしてミール・バフシの呼称はこのうち第1バフシに対してのみ用いられた。これが二つめの意味である。本論は第1バフシ職のみならず、史料上追跡できる第2バフシ職までを検討に付するので、これらの総称としてミール・バフシという用語は適切でない。

史料には、同職在任者に与えられた呼称として他に、(1) baḥṣī-i kull, (2) baḥṣī biḡī, (3) baḥṣī-i buzurg, (4) baḥṣī-i mamālik あるいは baḥṣī al-mamālik, (5) baḥṣī al-mulk, そして必ず複数形によって用いられた(6) baḥṣī-ān-i 'iḏām を検出できる。また後述する通り、筆者は(7) baḥṣī-i ḥuḏūr および(8) baḥṣī-i dar-ḥānah も同職在任者を指す呼称であったと考えている。以上のうち(1), (2), (3)はアクバル時代、ジャハーンギール時代にしか現れない呼称であるから、シャー・ジャハーン時代以降の第2バフシ以下を包摂できない。(4)は用例が乏しい。(5)は後述するような州政府配属のバフシまで包摂してしまう。(7), (8)はそれ自体考証を要する呼称であるから、総称としては不適切である。

それゆえ本論では(6) baḥṣī-ān-i 'iḏām から単数形を還元して「大バフシ」という呼称を総称として用いる。そして個別の就任者の職名に言及する場合、ジャハーンギール時代以前であれば「ミール・バフシ」、シャー・ジャハーン時代以降であれば「第1バフシ」、「第2バフシ」、「第3バフシ」と呼称する。なお、ムガル帝国時代の史料は、呼称の用法に厳密ではない。同一時期の同一人物に対して同一史料が別の呼称を用いる例さえ散見される。また、ある大バフシについて史料が単に baḥṣī としか言及しない用例もしばしば出現するので、逐一考証する必要がある。

1.2 大バフシの職務

大バフシの職務の概略は、Ibn Hasan および Qureshi によって示されている。たしかに両者が十分に利用しなかった「業務要領書」群 (dastūr al-'amal), イ

(9) アウラングゼーブ時代に第4バフシまで存在したという従來說に根拠がないことは後述する。

ンシャー文献群，そしてアーンドラ・プラデーシュ州古文書館所蔵の文書群を用いて，詳しく検討すべき問題点は数多い。しかしそのような詳細に関する調査は本論の範囲外に属するので，ここでは両者の記述を参考しつつ，以下の議論に必要な概略を描くにとどめる [Ibn Hasan 1936: 94-97, 215-228; Qureshi 1973: 77-84]。なおバフシという職（ないし身分）はもちろんパーブル，フマレーンの時代にも存在した。しかし以下ではマンサブ制度下における大バフシ職の職務を記述する。

大バフシの職務の第1は，勅令書の発行手続の一部を担当することであった。すなわち，マンサブの授与，ジャーギールの発給，免租地 (suyūrgāl) 等の下賜，および宰相職・財務長官職・宗務長官職などの顕職の任命に関する勅令は，大バフシの官庁を複数回通過して文書化され，大バフシその他の担当官による署名・押印のうえ発行された。

職務の第2は，マンサブダールの統括である。大バフシは，マンサブの加増やマンサブダールの新採用に関する記録簿，王府駐在のマンサブダールおよび諸州配属のマンサブダールの名簿などの公文書を作成した。またマンサブダールの兵員・軍備の管理も同類の職務であり，軍馬の烙印や兵士の認証に関する証明書の作成，烙印・認証の業務日誌の作成，烙印・認証に当たる職員の管理，軍役への参軍証明書の作成などがその内容であった。

第3は，宮廷の警護である。警護を直接担当するのは衛士（史料上の呼称は *čawki* ないし *kišik*）の集団であり，大バフシは衛士の記録簿を作成し，衛士の監督員を任命することによって，この集団を統括した。

第4は宮廷における君主への拝謁の管理である。マンサブダール採用候補者の拝謁を取り次いだり，宮廷に到着する州政府高官や外国使節を応接し謁見に付するのがその内容であった。マンサブ加増の請願も大バフシの仲介を要した。このとき君主に近侍する大バフシは玉座の右側に起立するのが定例であった [BNL: i, 380-381]。

第5は，諸州・諸軍団に配属された事績記録官 (*wāqi'ah-nawīs*) からの情勢報告を君主に上奏することである。事績記録官の任命は大バフシの権限下にあった。

以上第3, 第4, 第5の職務を合わせて考えれば, 大バフシ職の重要な機能のひとつが君主と外界との接触を統御することであったことを見いだせよう。大バフシはその職務上, 君主ときわめて近しい距離にある人物だったことになる。

また, 軍務部門の筆頭に位置した大バフシの職務は軍務関係の文書行政に大きく傾斜している。大バフシ就任者が備えていた素養の中に, しばしば文筆の才が含まれていたことはこのような大バフシの職務内容とおそらく関係がある。また, 就任の際あるいは祝日の慶賀の際, 大バフシに君主から恵与されたのは, 財務長官に対してと同様, インク壺あるいは筆ないし筆入れであった [JNt :9, 371 / JNa: 6, 326; MAI: 157, 196, 472]。このような大バフシ職の性格は, アクバルからジャハーンギールの時代にかけて同職を長くつとめた Šayḥ Farīd に関する次の二つの所伝によく現れている。ジャハーンギールは同人について,

私は, 自分の父にミール・バフシとして奉職していた Šayḥ Farīd Buḥārī に賜衣, 宝石ちりばめた刀, そして宝石ちりばめたインク壺と筆を下し, 同じ職に任じた。そして彼を引き立てて「私はおまえを刀と筆の主 (šāhib al-sayf wa al-qalam) だと思っている」と言った [JNt: 9 / JNa: 6]。

と書き残し, シャー・ジャハーン時代に成立した名士録にある同人の伝には,

彼は若いときから, 故陛下【アクバル】の御許で訓育を受け, ミール・バフシという高い地位によって栄達を得ていた。【中略】彼はマンサブ5000に達し, ミール・バフシ【の地位】に達していた。バフシの地位を持っていたとはいうものの, 彼は財務長官のような (wazīr-nišān) バフシであった [DhKh: i, 127]。

とある。

なお, 大バフシ職が備えていた書記および宮廷警護の機能は, モンゴル時代におけるモンゴル語書記とケシクとのつながりを想起させる [Melville 2006; 宮

2012]。ムガル帝国における大バフシの職能の詳細は、このような観点からもなお追究する余地があるが、これは本論の範囲の外にある。

1.3 その他のバフシ職

帝国を構成する州 (şūbah) には州総督 (şūbah-dār) が君主によって任命・配置されていた。この州政府には、それぞれバフシが大バフシによって任命・配置された。これらの州バフシは任地において、軍備の監査と軍人に対する俸給の業務にあたった。また州バフシは、事績記録官を兼務することが多かった。これの任務は、州行政の状況を記録し、その報告書を中央政府に送るというものであったため、州バフシ兼事績記録官の存在によって、州総督の行動は掣肘を受けることになった [Saran 1973: 163, 182-186]。

また遠征や反乱鎮圧のために派遣された帝国の軍団に配属されるバフシも見られる。これら軍団付属バフシの任務が、当の軍団の軍備の監査と俸給の管理であったことは無論である。また軍団付属バフシも、事績記録官を兼務する場合がしばしば見られる。この場合、その任務は中央政府に戦況を報告することであった。

さらに王子、王族、ないし有力貴族に付属するバフシも見られる。これらは「某人のバフシ」という言い方のみで史料に記されることが多い。そのような事例のいくつかは前後の文脈から「某人の軍団に配属されたバフシ」と解せるので、上記の軍団付属バフシの類型に属するものと考えられる。しかし「某人の家政 (sarkār) のバフシ」という表現をとる事例 [AIN: 1034; MAI: 195] や、「某人」にあたる箇所が王族女性である事例 [BNW: 119a; WAI: 46] は、その類型に属するとは考えにくい。この問題の考察は、王族、貴族の家政組織の実態にかんする情報を必要とするので、ここでは追究しない。

一方、中央政府には大バフシ職と別に、アハディーのバフシ職 (baḥṣī-ahādī-ān) が置かれていた。アハディーとはマンサブダールと異なり、配下の兵員を持たず、単独で君主に直属する軍人の身分である。大バフシがマンサブダールを統轄したのに対し、アハディーを統轄したのがアハディーのバフシであった [AA: i, 187]。すでに述べたとおり、帝国制度におけるマンサブダール

の重要性はアハディーのそれをはるかに凌駕していたから、この職の重みも大バフシに比べてはるかに乏しい。それゆえ大バフシ職就任者の中でも、この職を前歴として経験した者は多くない。

また従者のバフシ (baḥšī-i šāgird-pīšah) [JNt: 15 / JNa: 10; BNW: 142b, 168b, 178b, 191b; MAI: 158] なる職名も史料に見える。アウラングゼーブ死後の18世紀前半に作成された業務要領書 (dastūr al-'amal) 文献は、同職の管理下にある者たちとして、毒味役、敷布役、金工師、ラクダ番などを列挙している [Add. 6599 ii: 164a-164b]。これらは宮内の作業所 (kār-ḥānah) 職員を指すと考えられるが、宮内部門の長官 (mīr sāmān) とこのバフシとがいかなる関係にあったのかは不明である。

この他、baḥšī-i urdū (陣営のバフシ) [AN: iii, 785], baḥšī-i tūr-andāz-ān (弓兵のバフシ) [MAI: 248] も史料に検出できるが、用例が乏しいため詳細は不明である。

2 大バフシ職就任者の一覧

考察の前提として、大バフシ職就任者を特定し、一覧化する作業を行う。同様の試みは Athar Ali や Habib そして Anwar が行っているが、いずれも網羅的なものではないし、筆者の見解に合致しない部分もある [Habib 1969: 90-91; Athar Ali 1985: xxvii-xxx; Anwar 2001: 119-120]。以下では、一覧作成に先立ち、大バフシ職の定員を検討し、大バフシ職に等しいと見なせる2つの職名についての考証を行う。

2.1 大バフシ職の定員

アクバル時代における大バフシ職の員数は、史料の記述が不完全であるために、確実には知ることができない。同じ理由から、個々の大バフシの任免時期を復元することも不可能である。たしかに AA には、同書執筆の時期 (1595/6) までのアクバル時代におけるバフシたち15名の名前が列挙されてはいる。しかしその在任の証拠を他の史料に一切見いだせない者もそこには含まれてい

る。それゆえ前述したような、大バフシとは別の種類のバフシが混入していることが疑われるので、この記事は参考にすることができない [AA: i, 232]。

しかし、大バフシが同時に2名置かれる時期があったことは明らかである。例えば1574年9月から1576年3月までの時期においては、Šahbāz Hān と Ḥwāḡah Ġiyāt al-Dīn ‘Alī の両名が同時に同職に在任していなければならぬはずである (Šahbāz Hān [MT: ii, 189; TAc: 220]; Ḥwāḡah Ġiyāt al-Dīn ‘Alī [TAc: 195; MT: ii, 228])。後者について同時代史料が「第2のミール・バフシ」 [MT: ii, 312] と記していることは、このような2人体制の存在を裏付けるものと解釈すべきだろう。次代ジャハーンギールが、アクバル時代には「枢要の職には2名を並置」 [JNt: 48 / JNa: 39] していたと述べていることも、このような人事慣行の証拠である。以上が成り立つならば、この慣行は、1573/4年におけるマンサブ制度の導入および大バフシ職の成立とほぼ同時に確立していたことになる。

ただし大バフシの2名並置が常態であったとは考えられない。例えば1596年に降同職にあった Ġa’far Biḡ が1599年半ばに財務長官職に就いて以降、アクバル治世末年 (1605年) までの期間については、それまで彼と並行して同職にあった Farīd Buḡārī に並んで何者かが在任していた証拠は一切無いので、同職を同人が単独で担っていたものと考えべきである。以上を要するに、アクバル時代における大バフシ職の定員は2名であったが、常にこれが充足されていたわけではない、と考えられよう。また両名の序列関係や職務の分掌については、史料が乏しく、まったく知ることができない。

さてジャハーンギールは、大バフシを2名並置するアクバル時代の慣行を継承したと自ら述べている [JNt: 48 / JNa: 39]。諸史料の情報を総合すれば、この体制は、1606年に Ḥwāḡah Abū al-Ḥasan と ‘Abd al-Razzāq Ma’mūrī が同時に任命された時点で確立した。そして1614年1月に再び同職に任じられた Ḥwāḡah Abū al-Ḥasan が1621年1月にデカン遠征のために転出するまでは維持されていたものと考えられる。そしてその後1626年初頭まで、Šādiq Hān と ‘Abd al-Razzāq Ma’mūrī の任期の在任者は1名のみであった模様である。しかしそれ以降、1627年11月にジャハーンギールが死去するまでのおよそ2年

間の在職者については、判断を下せない。この期間には、‘Abd al-Razzāq Ma ‘mūrī の他、Irādat Ḥān, Ṣādiq Ḥān, Mir Ğumlah, Mu‘tamad Ḥān の4名が単に「バフシ」として史料に登場するものの、これが大バフシを意味するのか、他の何らかのバフシを指すのか、まったく判別を付けられない。このような状況には、その期間における政治の混乱が影響している可能性があり、この政情ゆえに史料の記述も著しく断片的である。

なお2名体制の意図についてジャハーンギールは、一方に事故ある場合の代替を強調している [JNt: 48 / JNa: 39]。これを信じるならば、両名の序列や職務の分掌は意図されていなかったことになる。分掌については、材料が乏しいために判断を下すことができないが、両名の間の序列については、後述するとおり、次第に形成されていた形跡がある。

シャー・ジャハーンの治世初年(1628年)に第2バフシ職がはじめて設けられた。これに対するのが第1バフシである。さらにアウラングゼーブ時代にはこれに第3バフシが加わった。第1から第3までいずれのバフシ職も定員は1名である。またその呼称から予想されるとおり相互の間には序列があり、後述するごとく、経歴の上でもマンサブの上でも上位・下位のバフシ職が逆転することはほとんどない。また職務の分掌については、年代記等の叙述史料から得られる情報は乏しいが、アウラングゼーブ時代の「業務要領書」文献は各々に課せられた職務の分担があったことを伝えている [DA: 138b-139b]。おそらくシャー・ジャハーン時代にもそれに類した分掌があったであろう。

なお第3バフシ職についての史料の記述は断片的なので、就任者を網羅しその任期を復元することは不可能である。それゆえ同職は、本論では考察の対象から外し、就任者一覧にも加えていない。また従来説には、アウラングゼーブ時代末までに第4バフシ職が設けられていたとするものがあるが、受け入れがたい [Sarkar 1920: 16; Sarkar 1984: 114]。アウラングゼーブ時代の年代記史料や業務要領書文献に、第4バフシ職の存在を裏付ける証拠は見られないからである。同職はアウラングゼーブ時代より後の年代記史料に現れるに過ぎない(1720年10月に Bayram Ḥān が同職に就任した例がある [ML: ii,914])。

2.2 「御前のバフシ」, 「宮廷のバフシ」

以下に示す一覧表では、考証の手続きはいちいち述べず、根拠史料の参照を挙げるにとどめた。しかし、次に示す二つの用語に関する考証は、従来の説とは異なる結論を導いており、定員数の理解、ひいてはジャハーンギール時代の大バフシ就任者の確定にも重大な意味を持っているので、以下の通りその手続きを開示する。

baḥṣī-yi ḥuḍūr および baḥṣī-yi dar-ḥānah という職名がジャハーンギールおよびシャー・ジャハーン時代の史料に見える。各々「御前のバフシ」, 「宮廷のバフシ」と訳せる職名を、従来研究は大バフシとは別のバフシを意味するものと考えている [Ibn Hasan 1936: 228-230]。しかし筆者は次のような考証により、これら二つがいずれも大バフシを指していたと考える。

baḥṣī-yi ḥuḍūr の用例は、ジャハーンギール時代に関しては、1606年11月に同時に同職に任命された ‘Abd al-Razzāq Ma‘mūrī と Ḥwāḡah Abū al-Ḥasan の1箇所のみである [JNt: 48 / JNa: 39]。このうち前者は、1612年6月タッタ地方の統治を命じられて転出した際、baḥṣī-yi dar-ḥānah の職を解かれたと史料にある [JNt: 128 / JNa: 110]。この間、1609年6月に同人が「バフシ」職にあるとの所伝以外 [JNt: 89 / JNa: 74]、その異動を伺わせる情報は史料に見いだせない。このことは、baḥṣī-yi ḥuḍūr が baḥṣī-yi dar-ḥānah に等しいと考える根拠になる。

一方、baḥṣī-yi dar-ḥānah の用例は、上述の ‘Abd al-Razzāq Ma‘mūrī の例の他、ジャハーンギール時代の1箇所のみが知られる。これは、1614年4月すでに同職にあった Ḥwāḡah Abū al-Ḥasan に加えて Ibrāhīm Ḥān が任じられたという所伝である [JNt: 148; JNa: 127]。Ḥwāḡah Abū al-Ḥasan は、これに先立つことわずか3ヶ月、1614年1月に baḥṣī-yi kull (全国のバフシ) に新たに任命されている [JNt: 146; JNa: 125]。また彼は1618年4月にはミール・バフシとして言及され [JNt: 257; JNa: 225]、少なくとも1620年7月までは同職にあった [JNt: 351; JNa: 309]。baḥṣī-yi kull がミール・バフシと等しいことには疑う余地が無い上、わずか3ヶ月の後に彼が baḥṣī-yi dar-ḥānah に異動したことを

説明できる状況は史料に見いだせない。以上の諸点は、*baḥṣī-yi dar-hānah* がミール・バフシすなわち大バフシに等しいと考える根拠になる。

以上二つの推考が成り立つならば、*baḥṣī-yi ḥuḍūr* も *baḥṣī-yi dar-hānah* も大バフシに等しいと見なせることになる。もしこの等式が成り立たないならば、1607年から1608年にかけての時期、同じく1612年から1615年にかけての時期には、*baḥṣī-yi ḥuḍūr* ないし *baḥṣī-yi dar-hānah* とは別に大バフシが存在しなければならぬことになるが、史料からはそのような事実を導くことが出来ない。

以上を踏まえれば、シャー・ジャハーン時代に成立した名士録史料において、*Islām Ḥān* の第2バフシ職が *baḥṣī-yi ḥuḍūr* と記された例も [DhKh: iii, 25], *Ġa'far Ḥān* の帯びた職が *mīr baḥṣī-yi ḥuḍūr-i ašraf-i a'lā* 「至尊至聖至高の御前のミール・バフシ」と記された例 [DhKh: iii, 32] も、大バフシ職を指したものとして正しく解釈できることになる。帝国政府の諸職は帝王への奉仕を究極の任務としていたであろうから、大バフシが、帝王の「宮廷」にあってその「御前」に随侍するものとして理解されていたとすれば、これに *baḥṣī-yi ḥuḍūr* や *baḥṣī-yi dar-hānah* という形容が与えられたことにも不思議はないであろう。

表1は、以上のような定員数と用語の考証を前提にして、史料から検出した43名の大バフシ職就任者を就任の年代順に一覧にしたものである。表1の枝番号(b)-1および(b)-2は、シャー・ジャハーン時代以降のそれぞれ第1バフシ職、第2バフシ職について、表を別にした結果である。ひとりの人物が複数回大バフシ職に任じられている場合は、その順に丸括弧で括った数字を名前の直後に添加した。それゆえその場合にはほとんど、昇進の関係上、第2バフシ職を扱う(b)-2のほうに、当の人物が初出することに注意されたい。

3 大バフシ職の運用における人的要因

本節では、大バフシ職の運用における人的要因を分析するため、同職就任者のマンサブ、職歴、親族関係を検討する。

表 1(a) : 大ノワンシ職就任者一覧 (ミール・パフシ)

就任者名	在任期間	就任時期	離任時期
Sabbāz Hān	—	1571年7月 [TAK: 134; AN: ii. 364]	1577年10月以降 [AN: iii. 218; MT: ii. 244]
Laskar Hān	—	1573年10月以前 [TA: ii. 443; MT: ii. 170; AN: iii. 70]	1575年3月以前 [AN: iii. 127]
Ḥwāghāh Qiyāṭ al-Dm 'Alī	1年6ヶ月以上	1574年9月以前 [TAK: 196]	1576年3月以降 [MT: ii. 228; AN: iii. 174]
Ğa'far Bīg (1)	—	1580/1年 [JNa: a50 / Jnt: 60-1]	不明
Ğa'far Bīg (2)	—	1587年以降 [AN: iii. 511]	1592年3月 [TA: ii. 415; MT: ii. 380-381]
Şayḥ Farīd	20年2ヶ月以上	1585年9月以前 [AN: iii. 468]	1605年11月以降 [Jnt: 9 / JNa: 6]
Nizām al-Dm Aḥmad	2年8ヶ月	1592年3月 [TA: ii. 415; MT: ii. 380]	1594年11月 [MT: ii. 396-97; AN: iii. 655]
Ğa'far Bīg (3)	—	1594年10月以前 [MT: ii. 396]	1596年以降, 1599年8月以前 [MT: ii. 216; AN: iii. 758]
Ḥwāghāh Abū al-Ḥasan (1)	7ヶ月	1606年11月 [Jnt: 48 / JNa: 39]	1607年5月 [Jnt: 60-1 / JNa: 50]
'Abd al-Razzāq Ma'mūrī (1)	5年7ヶ月	1606年11月 [Jnt: 48 / JNa: 39]	1612年6月 [Jnt: 128 / JNa: 110]
Wazīr al-Mulk	8ヶ月	1607年6月 [Jnt: 63 / JNa: 52]	1608年2月 [Jnt: 78 / JNa: 64]
Qāḍī 'Abd al-'Azīz	1ヶ月以上	1608年2月 [SD: 106v]	1608年3月 [Jnt: 79 / JNa: 66]
Ḥwāghāh Düst Muḥammad	5年10ヶ月	1608年3月 [Jnt: 79 / JNa: 66]	1614年1月 [Jnt: 146 / JNa: 125]
Mu'izz al-Mulk	1年10ヶ月	1612年6月 [Jnt: 128 / JNa: 110]	1614年4月 [Jnt: 148 / JNa: 127]
Ḥwāghāh Abū al-Ḥasan (2)	7年	1614年1月 [Jnt: 146 / JNa: 125]	1621年1月 [Jnt: 351, 368 / JNa: 309, 323]
Ibrāhīm Hān	1年1ヶ月	1614年4月 [Jnt: 148 / JNa: 127]	1615年5月 [Jnt: 162 / JNa: 139]
Şādiq Hān (1)	8年	1615年5月 [Jnt: 162, 176 / JNa: 139, 152]	1623年5月 [Jnt: 410 / JNa: 359]
'Abd al-Razzāq Ma'mūrī (2)	2年5ヶ月以上	1623年5月 [Jnt: 411 / JNa: 361]	1625年10月以降 [Jnt: 244]

※ ジャハーンギール時代の継承関係は複雑なので、筆者の理解を下図のとおり示す。

(1605年11月、即位時) Şayḥ Farīd

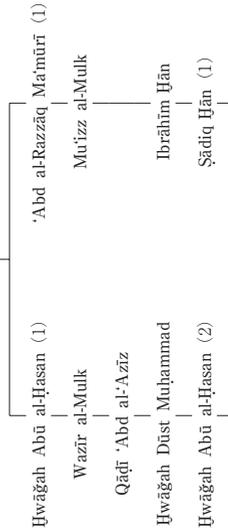


表 1(b)-1 : 大バフシ職就任者一覧 (第 1 バフシ)

就任者名	在任期間	就任時期	離任時期
Irādat Ḥān	1 ヶ月以上	1628年 2 月以前 [BNL: i, 159]	1628年 3 月 [BNL: i, 186; BNQ: 148b]
Ṣādiq Ḥān (2)	5 年 6 ヶ月	1628年 3 月 [BNL: i, 186]	1633年 9 月 [BNL: i, 538]
Islām Ḥān (2)	1 年 5 ヶ月	1633年10月 [BNL: i, 542]	1635年 3 月 [BNL: ib, 83]
Mīr Ġumlah (Muḥammad Amīn)	2 年 5 ヶ月	1635年 4 月 [BNQ: 341b; BNL: ib, 86]	1637年 9 月 [BNL: ib, 279]
Muṭamad Ḥān (2)	2 年	1637年 9 月 [BNL: ib, 279]	1639年 9 月 [BNL: ii, 161]
Ṣalābat Ḥān (2)	4 年11ヶ月	1639年 9 月 [BNL: ii, 161]	1644年 8 月 [BNL: ii, 380-1, 721]
Aṣālat Ḥān (2)	2 年 8 ヶ月	1644年 8 月 [BNL: ii, 385]	1647年 4 月 [BNL: ii, 657]
Ġa'far Ḥān	2 年 6 ヶ月	1647年 5 月 [BNL: ii, 681]	1649年11月 [BNW: 89a]
Ḥatīl Allāh Ḥān (3)	1 年 3 ヶ月	1649年11月 [BNW: 89a]	1651年 2 月 [BNW: 109b]
Luhrāsp Ḥān	11ヶ月以下	1651年 2 月 [BNW: 109b]	1652年 1 月以前 [BNW: 125a; AS: iii, 135]
Triḡad Ḥān (b. Aṣaf Ḥān)	4 年10ヶ月	1652年 4 月 [BNW: 135b; AS: iii, 143]	1657年 2 月 [AS: iii, 244]
Dānišmand Ḥān (2)	9 ヶ月	1657年 2 月 [AS: iii, 244]	1657年11月 [AS: iii, 267]
Muḥammad Amīn Ḥān	10年 1 ヶ月	1657年11月 [AS: iii, 267]	1667年12月 [AIN: 1067]
Dānišmand Ḥān (3)	2 年 7 ヶ月	1667年12月 [AIN: 1067]	1670年 7 月 [MAI: 105]
Laṣkar Ḥān (3)	6 ヶ月	1670年 7 月 [MAI: 105]	1671年 1 月 [MAI: 107]
Asad Ḥān (2)	2 年以上	1671年 1 月 [MAI: 107]	1673年1月以降 [MAI: 125]
Sarbuland Ḥān (2)	6 年 8 ヶ月以下	1673年 5 月以降 [MAI: 127]	1680年 1 月 [MAI: 187]
Rūḥ Allāh Ḥān (1)	10ヶ月	1680年 1 月 [MAI: 187]	1680年11月 [MAI: 195]
Himmat Ḥān (2)	2 ヶ月	1680年11月 [MAI: 195]	1681年 1 月 [MAI: 201]
Aṣraf Ḥān	5 年 8 ヶ月	1681年 2 月 [MAI: 206]	1686年 9 月 [MAI: 281]
Rūḥ Allāh Ḥān (3)	5 年10ヶ月	1686年 9 月 [MAI: 281]	1692年 7 月 [MAI: 347]
Bahrahmand Ḥān (2)	10年 4 ヶ月	1692年 7 月 [MAI: 349]	1702年11月 [MAI: 461]
Dū al-Fiḡār Ḥān (b. Asad Ḥān)	約 7 年	1702年11月 [MAI: 461]	1709/10年 [ML: ii, 677-8]

表 1(b)-2 : 大バフシ職就任者一覧 (第 2 バフシ)

就任者名	在任期間	就任時期	離任時期
Islām Ḥān (1)	1年10ヶ月	1628年2月 [BNL: i, 160-1]	1629年12月 [BNL: i, 291]
Mu'tamad Ḥān (1)	7年10ヶ月	1629年12月 [BNL: i, 291]	1637年9月 [BNL: ib, 279]
Tarbiyat Ḥān	1年5ヶ月	1637年9月 [BNL: ib, 279]	1639年2月 [BNL: ii, 135]
Ṣalābat Ḥān (1)	7ヶ月	1639年2月 [BNL: ii, 135]	1639年9月 [BNL: ii, 161]
Aṣḥāṭ Ḥān (1)	5年11ヶ月	1639年9月 [BNL: ii, 161]	1644年8月 [BNL: ii, 385]
Ḥatīl Allāh Ḥān (1)	1年7ヶ月	1644年8月 [BNL: ii, 385]	1646年3月 [BNL: ii, 491]
'Āqil Ḥān	3年2ヶ月以下	1646年3月 [BNL: ii, 491]	1649年5月以前 [BNW: 68b, 261a]
Ḥatīl Allāh Ḥān (2)	6ヶ月以下	1649年5月以降 [BNW: 68b, 261a]	1649年11月 [BNW: 89a]
Siyādat Ḥān	7ヶ月	1649年11月 [BNW: 89a-b]	1650年6月 [BNW: 98b]
Laṣkar Ḥān (1)	1年5ヶ月以上	1650年10月 [BNW: 103a-b]	1652年3月以降 [BNW: 135a; AS: iii, 143]
Irādāt Ḥān (Mīr Ishāq)	9ヶ月以上	1653年3月以前 [BNW: 154b]	1653年12月 [BNW: 172a]
Laṣkar Ḥān (2)	1年8ヶ月	1653年12月 [BNW: 172a]	1655年8月 [BNW: 213a]
Dāniṣmand Ḥān (1)	1年6ヶ月	1655年8月 [BNW: 213a]	1657年2月 [AS: iii, 244]
Asad Ḥān (1)	13年3ヶ月	1657年2月 [AS: iii, 244]	1670年5月 [MAI: 103]
Himmat Ḥān (1)	2年1ヶ月	1670年7月 [MAI: 105]	1672年8月 [MAI: 120]
Sarbuland Ḥān (1)	10ヶ月以上	1672年8月 [MAI: 120]	1673年5月以降 [MAI: 127]
Ṣafī Ḥān	1年7ヶ月以上	1677年11月以前 [MAI: 162]	1679年6月 [MAI: 176]
'Āqil Ḥān (Mīr 'Askarī)	1年4ヶ月	1679年6月 [MAI: 176]	1680年10月 [MAI: 195]
Rūḥ Allāh Ḥān (2)	5年10ヶ月	1680年11月 [MAI: 195]	1686年9月 [MAI: 281]
Bahrahmand Ḥān (1)	5年10ヶ月	1686年9月 [MAI: 281]	1692年7月 [MAI: 349]
Muḥlis Ḥān	8年6ヶ月	1692年7月 [MAI: 349]	1701年1月 [MAI: 434]
Rūḥ Allāh Ḥān (b, Rūḥ Allāh Ḥān)	3年4ヶ月	1701年1月 [MAI: 434]	1704年5月 [MAI: 489]
Ṣadr al-Dīn Muḥammad Ḥān	約7年	1704年5月 [MAI: 489]	1711/2年 [ML, ii, 685-6]

表 2(a) : 大バフシ職就任時のマンサブ (ミール・バフシ)

	就任者名	マンサブ	典拠
アクバル	Šahbāz Ḥān	—	
	Laškar Ḥān	—	
	Ḥwāḡah Ġiyāṭ al-Dīn ‘Alī	—	
	Ġa’far Bīg (1)	—	
	Ġa’far Bīg (2)	—	
	Šayḡ Farīd	〈700〉	[AN: iii, 456]
	Nizām al-Dīn Aḥmad	—	
	Ġa’far Bīg (3)	〈2000〉	[TA: ii, 446]
ジャハーンギール	Ḥwāḡah Abū al-Ḥasan (1)	1000/500	[JNt: 37 / JNa: 46]
	‘Abd al-Razzāq Ma’mūrī (1)	〈600〉	[INJ (L) : 508]
	Wazīr al-Mulk	〈1300/550〉	[JNt: 36 / JNa: 45]
	Qāḍī ‘Abd al-‘Azīz	—	
	Ḥwāḡah Dūst Muḥammad	—	
	Mu’izz al-Mulk	〈1800〉	[JNt: 113 / JNa: 96]
	Ḥwāḡah Abū al-Ḥasan (2)	(1500)	[JNt: 80 / JNa: 66]
	Ibrāhīm Ḥān	1500/600	[JNt: 148 / JNa: 127]
Šādiq Ḥān (1)	〈1000/500〉	[JNt: 180 / JNa: 156]	
‘Abd al-Razzāq Ma’mūrī (2)	—		

3.1 大バフシ職就任とマンサブとの関係

大バフシ職への就任とその時点での就任者のマンサブとの間にいかなる関係を見いだせるかを検討する。マンサブは貴族制度としての側面と、俸給制度としての側面を持っていたから、大バフシ職に就任するための人士の格式、および同職の職務と俸給額との関係性がこの作業によって問われることになる。

就任時に就任者が保有していたマンサブの数値を整理した結果が表 2 である。同表の「マンサブ値」の欄には、就任に際してマンサブが更新されたことが史料に記録されていれば、その数値を記入した。この情報が無い者については、就任前 2 年以内について得られる数値を 〈 〉 内に示し、それよりも過去の数値は () 内に示した。これら 2 つの数値は、データとしての精度が劣るので、補助的な参考データとして取り扱うべきである。さらに、いかなる数値も不明である場合、あるいはその数値が有意でない場合 (例えば、第 2 バフシに在職歴

表 2 (b)-1 : 大バフシ職就任時のマンサブ (第 1 バフシ)

	就任者名	マンサブ	典拠
シャ ー ・ ジ ャ ハ ー ン	Irādat Ḥān	<4500/4000>	[BNL: i, 159]
	Ṣādiq Ḥān (2)	4000/4000	[BNL: i, 181]
	Islām Ḥān (2)	<5000/5000/5000>	[BNL: i, 396]
	Mir Ğumlah (Muḥammad Amīn)	5000/2000	[BNL: ib, 86]
	Mu'tamad Ḥān (2)	4000/1200	[BNL: ib, 297]
	Ṣalābat Ḥān (2)	3000/1500	[BNL: ii, 161]
	Aṣālat Ḥān (2)	—	
	Ġa'far Ḥān	5000/4000	[BNL: ii, 681]
	Ḥalīl Allāh Ḥān (3)	<4000/3000>	[BNQ: 14a]
	Luhrāsp Ḥān	4000/3000	[BNQ: 109b]
ア ウ ラ ン グ ゼ ー ブ	I'tiqād Ḥān (b. Āṣaf Ḥān)	4000/500	[BNQ: 135b]
	Dānišmand Ḥān (2)	3000/800	[AS: iii, 244]
	Muḥammad Amīn Ḥān	3000/1500	[AS: iii, 267]
	Dānišmand Ḥān (3)	(5000/2500)	[AIN: 880]
	Laškar Ḥān (3)	5000/5000	[MAI: 105]
	Asad Ḥān (2)	(4000/3000)	[AIN: 762]
	Sarbuland Ḥān (2)	(4000/2500)	[MAI: 139]
	Rūḥ Allāh Ḥān (1)	(1500/400)	[AIN: 477]
	Himmat Ḥān (2)	—	
	Ašraf Ḥān	(3000/400)	[AIN: 762; MAI: 97]
Rūḥ Allāh Ḥān (3)	—		
Bahrahmand Ḥān (2)	4000/2000	[MAI: 349]	
Dū al-Fiḡār Ḥān (b. Asad Ḥān)	(5000/4000)	[MAI: 374]	

のある第 1 バフシについて知られる直近のマンサブ値の情報が、同人の第 2 バフシ就任時のそれしか得られない場合)、「—」を記入した。

数値のほとんどは、ザート数/サワール数の 2 元表示によっている。単元表示のものはザート数を示しているが、ジャハーンギール時代の 3 例は当人のマンサブにサワール数が無かったことを意味するのではなく、史料に記載がないだけである。一方、3 元表示のものの第 3 項はド・アスパ・セ・アスパ数である。以上の数値の大小が、当人の位階の高低を示していることは言うまでもない⁽¹⁰⁾。

(10) マンサブについて、日本語の研究文献としては [小名 1985] がある。またマン

表 2 (b)-2 : 大バフシ職就任時のマンサブ (第 2 バフシ)

	就任者名	マンサブ	典拠
シャー・ ジャハーン	Islām Ḥān (1)	<4000/2000>	[BNL: i, 268]
	Mu'tamad Ḥān (1)	3000/1000	[BNL: i, 291]
	Tarbiyat Ḥān	2000/1200	[BNL: ib, 279]
	Ṣalābat Ḥān (1)	3000/1000	[BNL: ii, 135]
	Aṣālat Ḥān (1)	<3000/2500>	[BNL: ib, 297]
	Ḥalīl Allāh Ḥān (1)	3000/2000	[BNL: ii, 385]
	'Āqil Ḥān	2500/1000	[BNL: ii, 491]
	Ḥalīl Allāh Ḥān (2)	<4000/3000>	[BNW: 14a]
	Siyādat Ḥān	3000/1000	[BNW: 89b]
	Laṣkar Ḥān (1)	2000/800	[BNW: 103a]
	Irādat Ḥān (Mīr Ishāq)	<2000/800>	[BNW: 151b]
	Laṣkar Ḥān (2)	<3000/1000>	[BNW: 151a]
	Dānišmand Ḥān (1)	2500/600	[BNW: 213a]
アウラン グゼーブ	Asad Ḥān (1)	2500/800	[AS: iii, 244]
	Himmat Ḥān (1)	<3000/1200>	[AIN: 981; MAI: 71, 97]
	Sarbuland Ḥān (1)	(3000/1500)	[AIN: 817]
	Ṣafī Ḥān	(3000/1500)	[AIN: 1034]
	'Āqil Ḥān (Mīr 'Askarī)	(2500/700)	[AIN: 981]
	Rūḥ Allāh Ḥān (2)	(1500/400)	[AIN: 477]
	Bahrahmand Ḥān (1)	—	
	Muḥliṣ Ḥān	2500/700	[MAI: 349]
	Rūḥ Allāh Ḥān (b. Rūḥ Allāh Ḥān)	<3000>	[MAI: 404]
Ṣadr al-Dīn Muḥammad Ḥān	<3000/1000>	[MAI: 472]	

本研究の対象とする時代を通じて、マンサブの授与と増加が激増していたことは従来の研究によって知られている。ザート数500以上のマンサブの総計額について見れば、アクバル時代末期（1595-6年）に対して、ジャハーンギール時代末期（1621-2年）は約2.5倍、シャー・ジャハーン時代末期（1657年）は約4.2倍という結果が得られるという [Athar Ali 1985: xiii-xiv]。それゆえ表のデータを、単純に比較することには意味がない。ここではさしあたり、ジャハーンギール時代以前と、シャー・ジャハーン時代以降とに分けて、その最小値と最大値を検出する。就任者に要求されたマンサブの格はその範囲内に位置

サブを構成する各数値について詳しくは [Athar Ali 1997: 38-43] を見よ。

するはずだからである。なお、シャー・ジャハーン時代以降においては、第1バフシ職と第2バフシ職が分化するので、両者を別に検討することも必要である。

ジャハーンギール時代以前については、データの欠落をあえて捨象して観察すれば、ザート数1000から同1500という範囲を得られる。さらに、補助的な参考データを勘案すれば、ザート数600から同2000という範囲に就任者のマンサブを位置づけることができる。一方シャー・ジャハーン時代以降の諸事例のうち、第2バフシ職就任前に第1バフシ職に就くという、異例の経歴を辿った Rūḥ Allāh Ḥān のデータを除外すれば、第1バフシ職についてはザート数3000から同5000という範囲を得られる。また第2バフシ職についてはザート数2000から同3000という範囲を得られ、これに補助的な参考データを加えれば、ザート数2000から同4000という範囲を得られる。

以上の結果からは、大バフシ職就任者のマンサブがきわめて広い範囲にわたっていたことを読み取れる。数値の推移のみに注目しても、そこに一定の傾向を見いだすことは困難である。さらにシャー・ジャハーン時代以降については、第1バフシ職の数値の範囲と第2バフシ職のそれとは、重なり合ってさえいる。以上の事実は、大バフシ職の就任とマンサブの数値との間に本質的な関連性はなかった、ということを示している。つまり特定の格のマンサブダールをこの職に結び付ける貴族制度上の原則も、この職の職務に特定のマンサブを対応させる俸給制度上の原則も、存在しなかったということである。またその特徴が、本研究の対象とする時代を通じて一貫していたことも確認すべき事柄である。

従来の研究は、特定の官職に対応した特定のマンサブの格づけがムガル帝国の制度運用に存在したか否かについて、十分な見識を持っていない。アウラングゼーブ時代のマンサブ制度を研究した Athar Ali は、マンサブと官職との対応が確立されていたと推論した一方 [Athar Ali 1997: 146-7], 官職への任用とマンサブの更改とが必ずしも同期しない現象も認めざるを得なかった [Athar Ali 1985: xvi-xx]。以上の観察によって、少なくとも大バフシ職の運用に関する限り、マンサブとのこのような没関係が根拠をもって裏付けられたことになるだろう。

但し、ある特定の時点においては、第1バフシ在職者のマンサブが第2バフシ在職者のそれに対して上位にあるという原則が働いていたことには注意すべきである。この原則に反する現象は、本研究の対象とする全時代を通じてわずか1例しかない⁽¹¹⁾。そうであるならば、特定の官職に固有のマンサブの格は存在しないものの、官職の序列に対応した、在職者どうしの相対的な優劣はマンサブによって表現されていた、と考えてよいことになる。はたしてこのような原則が、財務や宮務など他の部門に属する官職との間にも働いたか否かは、別の研究の機会に委ねねばなるまい。

ところで、第1バフシと第2バフシとの間の序列がこのように両名のマンサブの間に格差を生んでいたことは、両者が分化せぬまま2人体制が取られていたジャハーンギール時代における運用の実態を知る上での手がかりになる。この時代において、並行する2名の大バフシが近接する時期に更改されたマンサブ値を比較すると、次の通りとなる。

年代	大バフシ職在任者名	マンサブ値	典拠
1611年3月	Ḥwāḡah Dūst Muḥammad	2000/1200	JNt: 110 / JNa: 93
同年4月	'Abd al-Razzāq Ma'mūrī	1800 (dāt 値のみ)	JNt: 112 / JNa: 95
1615年3月	Ḥwāḡah Abū al-Ḥasan	4000/1200	JNt: 160 / JNa: 138
同年同月	Ibrāhīm Ḥān	2000/1000	JNt: 160 / JNa: 138
1618年4月	Ḥwāḡah Abū al-Ḥasan	4000/2000	JNt: 257 / JNa: 225
同年6月	Ṣādiq Ḥān	2000/2000	JNt: 263; JNa: 232
1620年5月	Ṣādiq Ḥān	2500/1400	JNt: 348; JNa: 306
同年7月	Ḥwāḡah Abū al-Ḥasan	5000/2000	JNt: 351; JNa: 309

以上4例を総合すると、少なくとも1615年以降、一方の大バフシの、他方に対する優位が確立していたように思われる。前述したとおり、ジャハーンギールは1名に事故ある場合に備えての2名体制であることを強調しているのであ

(11) 1639年9月に第1バフシに就任したṢalābat Ḥānはマンサブ3000/1500を就任時に得たが、同時に第2バフシに就任した Aṣḡalat Ḥānはその時点ですでにマンサブ3000/2500を得ていた

るが [JNt: 48 / JNa: 39], 即位間もない1606年に記された彼のこの言葉とは異なる大バフシ職の運用が, 1615年までに行われるに至っていたものと考えべきである。もしこの推論が成り立つならば, ジャハーンギール時代にこのようにして形成された序列関係のある2人体制が, シャー・ジャハーン時代に第1バフシ, 第2バフシという体制へと整理された, という筋道を描くことができるだろう⁽¹²⁾。

3.2 大バフシ職就任者たちの職歴

大バフシ就任者の経歴の特徴を検討するため, 任期, 同職就任前の職歴, 同職離任後の職歴の3点から考察する。

3.2.1 大バフシ職の任期

大バフシ職の任期は既出の表1に示したとおりである。アクバル時代については, 判断を下せるだけの材料がない。その他3人の君主の時代については, いずれも任期の長短に著しいばらつきがあるため, 意味ある平均値を導くことはできない。このような著しい任期の不均衡は, すでに財務長官など中央政府の諸職全般について Athar Ali が導き出している結論に合致する。ただし任期の長短の要因を Athar Ali の述べるように, 在職者に対する君主の信任の強弱のみに帰せられるかどうかについては, さらなる検討を要する [Athar Ali 1985: xxii]。

3.2.2 大バフシ職就任前の職歴

大バフシ就任者の, 就任前の職歴を整理すると表3のとおりとなる。本表においては, 既出の表1, 表2と異なり, 複数の就任歴を人物ごとにまとめた上で, 就任の早い順に配列してある。第1バフシ, 第2バフシいずれにも就任歴

(12) シャー・ジャハーン時代に編纂された名士録は 'Abd al-Razzāq Ma'mūrī が Ḥwāḡah Dūst Muḥammad に「同行する第2 baḡṣī」であったと伝えているが, この所伝はシャー・ジャハーン時代の用語法を逆用していると思われるので, 重視すべきではない [DhKh: i, 206]。

がある者については、第1バフシ就任の時期を基準にした。各人の「職歴」欄では左から右に年代順に職歴が列挙されている。第1バフシ就任の前に第2バフシの職歴があるなど、バフシ職に複数の履歴を当人がもつ場合、それぞれに先立つ職歴が個別に記入されている。分析において必要な場合には、第1バフシの前職歴と第2バフシのそれとを区別するためである。

例えば Ḥalīl Allāh Ḥān の場合、儀典長を最初の職務とし、砲兵隊長、斥候隊長、御鷹番・御馬番、斥候隊長を経て、第2バフシに就任し、これを退いた後、メーワート地方総督、カール城砦司令官を経験して、再び第2バフシに就任し、ついで第1バフシに就任した、という職歴をたどったことが示されている。

表3からは次のような特徴を観察できる（以下、職名の直後に丸括弧で表示した数字は、その職を前歴として持つ者の数である）。

第1に、大バフシ職以外の何らかのバフシ職に就いた経歴を持つ者が多い。軍団付属のバフシ(10)、アハディーのバフシ(6)、州政府バフシ(6)、のごとくである。この他、マンサブ制度導入以前にミール・バフシ職にあった例(2)、ジャハーンギール時代末期の混乱期に「バフシ」として史料に見えるものの、その位置づけが不明瞭である例(4)、継承戦争を戦うアウラングゼーブ付属の「第2バフシ」の例(1)がある。ただしこの範疇に属する者の数は、重複を除くと、全43名中21名に過ぎない。何らかのバフシ職という前歴は、最も優勢な傾向ではあったものの、大バフシ職就任への要件ではなかったと考えなければならない。

またシャー・ジャハーン時代以降に限定される問題だが、Irādat Ḥān 以下、その時期における第1バフシ職就任者20名のうち、第2バフシ職を前歴として経験している者は12名に留まる。また第2バフシ職を経験しながら、第1バフシ職に就かなかった者も9名に上る。以上からは、第1バフシ職への就任に関して、第2バフシ職としての前歴も、必要十分条件ではなかったという実情を導き出せる。

第2に、州総督(14)ないしその下位単位における県総督(7) (fawğ-dār⁽¹³⁾) という、地方統治に関わる職を経験した者が多い（重複を除くと18名）ことも観察できる。

後者はもっぱら第2バフシ職就任前の履歴として現れるが、このことは、州総督と県総督との格差を反映するものと考えてよいだろう。ただし、州総督がむしろバフシ職離任後の職務として卓越していたことは、後述するとおりである。

第3に、財務長官(2)や宮内長官(6)を経験した者が複数いることには注意を要する。職務の分掌は別として、人材の運用の上では、財務および宮内の両部門と、大バフシの統括する軍務の部門との間に、厳格な区分はなかったという解釈を、ここからは引き出せるであろう。ただし財務長官を経て大バフシ職に至った2名の事例は、次のような、やや特殊な背景を備えていたので、例外的な現象と考えるべきである。すなわち、Wazīr al-Mulk は、ジャハーンギール即位の際に同職に任じられた(史料上は wazīr とある)が、この任用には、同人が王子時代のジャハーンギールの家政にたずさわる財務官(史料上は dīwān とある)であったことが作用していた可能性が高い。同人の任期はわずか1年半であり、その後大バフシ職に就くまでの行動は、マンサブの授与以外、何も分らない。もう一人の Ḥwāḡah Abū al-Ḥasan も大バフシ職就任前に財務長官を務めたが、その任期(1608年4月以前~1611年9月)については Wazīr al-Mulk と同様、動向は全く知られない。このような同人の影の薄さには、1607年4月に王子 Ḥurram (後のシャー・ジャハーン) と孫娘との婚約を成立させていたもう一人の財務長官 I'timād al-Dawlah の権勢が影響していたかも知れない。

第4に、君主に近しく奉仕する様々な職務が前歴に含まれている。それらの職務はおおむね次の3つに分類できよう。

(a) 君主直属の武備を管理する職務。御馬番(8)、御武具番(6)、砲兵隊長(6)がこれにあたり、御鷹番(3)もこれに準じると見なせるかも知れない。

(b) 君主への拝謁を管理する職務。儀典長(6)、御浄所監理官(4)、特別謁見場監理官(2)などの職がこれにあたる。儀典長は君主への拝謁の段取りを付ける役割を担う職であり、外国からの使節を出迎えるのも同職の任務の一つであった

(13) fawḡ-dār に対する「県総督」という訳語は暫定案である。州より小さい行政区分(県ないし郡)に対して中央から軍団とともに派遣され、当地の治安維持ないし徴税の活動にあたった(fawḡ-dār の職務については [Siddiqi 1961])。派遣先の範囲は必ずしも既存の県・郡の区分に限定されず、柔軟に運用された [Richards 1986: 16-17]。

表 3 : 大バフシ職就任者の就任前の職歴

就任者名	職名	就任前の職歴
Šahbāz Ḥān	ミール・バフシ	不明
Laškār Ḥān	ミール・バフシ	ミール・バフシ (マンサブ制度導入以前) [AN: ii. 244; 270; 364; iii. 70; MT: ii. 170]
Ḥwāgāh Ġiyāṭ al-Dīn 'Alī	ミール・バフシ	ミール・バフシ (マンサブ制度導入以前) [TAIf: 644; AN: ii. 244], 「帝国諸軍のバフシ」 [AN: ii. 330-1], グジャラート州バフシ兼財務官 [TA: ii. 273; MT: ii. 70; AN: iii. 64]
Ġaḥfar Bīg	ミール・バフシ	不明
	ミール・バフシ	不明
	ミール・バフシ	『千年史』編纂員 [MT: ii. 318], 「兵士の管理と給与の決定」の職務 [AN: iii. 404], デカン遠征軍バフシ [TA: ii. 383], 対 Rānā 遠征軍バフシ [AN: iii. 440], イラーハーバード州バフシ [AN: iii. 511]
Šayḅ Farīd	ミール・バフシ	賜与地 (suyūrgāh) の管理 [AN: iii. 234]
Niẓām al-Dīn Ahmad	ミール・バフシ	『千年史』編纂員 [MT: ii. 318], グジャラート州バフシ [TA: ii. 368; MT: ii. 322; AN: iii. 403; 511], 王領地の管理 [AN: iii. 605]
'Abd al-Razzāq Mā'mūrī	ミール・バフシ	ビハール州バフシ [AN: iii. 511], ベンガル遠征軍バフシ [AN: iii. 784], ジャハーンギール配下のバフシ [JNt: 9 / JNa: 6]
	ミール・バフシ	タッタ州総督 [JNt: 181 / JNa: 156], デカン遠征軍バフシ [JNt: 375 / JNa: 330]
Wazīr al-Mulk	ミール・バフシ	財務長官 [JNt: 13 / JNa: 9]
Qāḍī 'Abd al-'Azīz	ミール・バフシ	不明
Ḥwāgāh Dūst Muḥammad	ミール・バフシ	不明
Muẓẓ al-Mulk	ミール・バフシ	宮内財務官 (dīwān-i buyūtūḥ) [JNt: 27 / JNa: 21], ジャハーンギールの軍のバフシ [JNt: 034 / JNa: 027]
Ḥwāgāh Abū al-Ḥasan	ミール・バフシ	王子 Dāniyāl 付属の財務官 (mīr dīwān) [Gt: i. 515], ハーンデーシュ州バフシ [AAB: 46v]
	ミール・バフシ	財務長官 [JNt. 80, 115 / JNa. 66, 98]
Ibrāhīm Ḥān	ミール・バフシ	グジャラート州バフシ [DhKh: i. 143]
Šādiq Ḥān	ミール・バフシ	不明
	ミール・バフシ	パンジャール州総督 [JNt: 410, 436, 474 / JNa: 360, 381, 393] (JNt: 436 が当該の人物を Mahābat Ḥān とするのは校訂ミス), バフシ [INJ: 260]
Irādāt Ḥān	第1バフシ	宮内長官 (mīr-i sāmān) [JNt: 171, 287, 302 / JNa: 147, 253, 267], カシユミール州総督 [JNt: 357; JNa: 314], ジャハーンギールの軍のバフシ [JNt: 412 / JNa: 361; INJ: 286]
Islām Ḥān	第2バフシ	ジャハーンギール州バフシ (hākīm) [BG: 147a; Athar Ali 1985: no. 1577]
	第1バフシ	アーグラ州総督 [BNL: i. 291, 369], グジャラート州総督 [BNL: i. 369, 396, 421, 451]
Mīr Ġumlah (Muḥammad Amin)	第1バフシ	再上奏官 (ard-i mukarrar) [JNt: 276 / JNa: 244], 宮内長官 (ḥān sāmān) [JNt: 357 / JNa: 314], バフシ [INJ: 278], 宮内長官 [BNL: i. 258, 461]

Mutamad Ḥān	第2バフシ	アハディーのパフシ [JNt: 171 / JNa: 147], 王子 Ḥurram 軍バフシ [JNt: 193 / JNa: 167], 砲兵隊長 [JNt: 255 / JNa: 223], 再上奏官 [JNt: 357 / JNa: 314], デカン遠征軍バフシ [JNt: 367 / JNa: 323], 「ジャハーニンギール・ナーマ」補筆 [JNt: 401-2 / JNa: 352], バフシ兼儀典長 [mir tüzük] [JN: 249, 254]
Tarbiyat Ḥān	第1バフシ	第2バフシ
Ṣalābat Ḥān	第2バフシ	スイルヒンド・ヒサール県総督 (fawğ-dār) [BNL: i, 43], ジャーン朝への使者 [BNQ: 265a; BNL: i, 465], 御馬番 (āḥtah biğr) [BNL: ib, 67]
Aṣālat Ḥān	第1バフシ	御武具番 (qūr biğr) [BNL: i, 417; ii, 135]
Ğaʿfar Ḥān	第2バフシ	王子 Šah Šuğā 軍バフシ [BNL: i, 538], アハディーのパフシ [BNL: ib, 67], デリー州総督 [BNQ: 341b; BNL: ib, 87]
Ḥaīl Allāh Ḥān	第1バフシ	第2バフシ
Luhrāsp Ḥān	第1バフシ	財務長官の業務を代行 [BNL: ii, 132], パンジャープ州総督 [BNL: ii, 500]
ʿĀqil Ḥān	第2バフシ	儀典長 [BNQ: 190b], 砲兵隊長 [BNL: i, 473], 斥候隊長 (qarawul biğr) [BNL: ii, 21], 御馬番・御馬番兼務 [BNL: ii, 228], 斥候隊長 [BNL: ii, 179]
Siyādat Ḥān	第2バフシ	メーワート地方総督 (fawğ-dār) [BNW: 14a], カーブル城岩司令官 [BNW: 67b, 69b]
Iʿtiqād Ḥān (b. Aṣaf Ḥān)	第1バフシ	第2バフシ
Irādat Ḥān (Mīr Ishāq)	第2バフシ	不明
Dānišmand Ḥān	第2バフシ	軍馬烙印監理官 (dārūğah-i dāğ) [BNL: ib, 87; ii, 142], 再上奏官 [BNL: ii, 134], 宮内財務官 [BNL: ii, 142], 宮内長官 [BNL: ii, 244], 諸州報告上奏官 [BNL: ii, 431]
Muḥammad Amin Ḥān	第1バフシ	軍馬烙印監理官 [BNL: i, 543], アフト州総督代理 [BNL: ii, 164], 軍馬烙印監理官 [BNL: ii, 245], ダウラターバー下城岩司令官 [BNL: ii, 510]
Laṣkar Ḥān	第2バフシ	不明
	第2バフシ	儀典長 [BNW: 92b], 象舎監理官 [BNW: 123b], 御馬番 [BNW: 143b]
	第1バフシ	不明
	第2バフシ	第2バフシ
	第1バフシ	デリー州総督 [AIN: 451, 464, 880, 961, 979]
	第2バフシ	財務長官代理 [BNW: 249b; AS: iii, 265]
	第1バフシ	錫矛手管理官 [BNL: ii, 434], 儀典長 [BNL: ii, 492], サファヴィー朝への使者 [BNL: ii, 492-3], 御馬番 [BNW: 45b, 49b], 儀典長 [BNW: 89b]
	第2バフシ	カンダハール派遣軍バフシ [BNW: 151a]
	第1バフシ	カンジュミール州総督 [AS: iii, 247; AIN: 195], ムルターン州総督 [AIN: 217], タッタ州総督 [AIN: 484, 877], パトナ州総督 [AIN: 877, 972; MAI: 71], ムルターン州総督 [MAI: 74, 104]

Asad Hān	第2パフシ 第1パフシ	御馬番 [BNW: 152b, 154a, 169b], 諸州報告上奏官 [BNW: 206b, 216b] 財務長官代理 [MAI: 103]
Sarbuland Hān	第2パフシ	御馬番 [AS: iii, 244], 砲兵隊監理官 [AS: iii, 271], 御武具番 [MAI: 84], 御鷹番 [MAI: 106], 「下僕たち」 [bandah-hā-i ḡilaw] の監理官 [MAI: 118], アーグラール州総督 [MAI: 118]
Ṣafī Hān	第1パフシ	不明
'Āqīl Hān (Mīr 'Askarī)	第2パフシ	カンダハール派遣軍パフシ兼報告記録官 (wāqī'ah-nawīs) [BNW: 128b], デカン4州パフシ兼報告記録官 [BNW: 144b, 170a, 229b], カーネグラー城督司令官 [AS: iii, 248; AIN: 292], デリー城督司令官 [AIN: 292, 347], デカン派遣軍パフシ [AIN: 396], オリッサ州総督 [MAI: 90], アーグラール州総督 [MAI: 147]
Rūḥ Allāh Hān	第1パフシ	アウランゼーブ配下の第2パフシ [AIN: 44], ダウラターバード城督司令官 [AIN: 193-4, 416], ミヤーン・ドアーブ総督 (fawḡ-dār) [AIN: 478, 625], 御浄所 (gush-hāmāh) 監理官 [AIN: 851], 駅遞 (dāk-čawākt) 監理官 [MAI: 82]
Himmat Hān	第1パフシ 第2パフシ	御建物長官 (mīr-i timārat) [AS: iii, 266], デリー州財務官 [AS: iii, 266], アハデイーのパフシ [AIN: 829-30], 御馬番 [AIN: 1061], タムニーニ総督 (fawḡ-dār) [MAI: 127], サハラランブル総督 (fawḡ-dār) [MAI: 144], 御馬番 [MAI: 150], 宮内長官 [MAI: 156, 160], 第1儀典長 [MAI: 157], 砲兵隊長 [MAI: 176]
Ašraf Hān	第1パフシ	第1パフシ
Bahrahmand Hān	第2パフシ	第2パフシ
Dū al-Fiqār Hān (b. Asad Hān)	第1パフシ	アーグラール近郊総督 (fawḡ-dār) [AIN: 823, 839], 御武具番 [AIN: 852; MAI: 84], 鈍矛手管理官 [AIN: 966], 特別謁見場 (dīwān-i ḥāṣṣ) 監理官 [MAI: 82], 第3パフシ [MAI: 105]
Mubliṣ Hān	第2パフシ	御鷹番 [MAI: 120], 御浄所監理官 [MAI: 132], イラーハーバード州総督 [MAI: 150, 153]
Rūḥ Allāh Hān (b. Rūḥ Allāh Hān)	第1パフシ	宝石庫監理官 [BNW: 99b], カンダハール派遣軍パフシ兼報告記録官 [BNW: 131a], 軍馬烙印監理官 [BNW: 144b], カンダハール派遣軍財務官 [AS: iii, 158], 宝石庫監理官 [BNW: 180a], 御文庫監理官 [BNW: 206b], カシムミール州総督 [AIN: 302, 455, 564], 王女家政財務官 [AIN: 1049], 宮内長官 [MAI: 102, 139, 142], 報告上奏官 (wāqī'ah-bwān) [MAI: 156]
Ṣadr al-Dīn Muḥammad Hān	第2パフシ	アハデイーの筆頭パフシ (mīr baḥṣī) [MAI: 172, 176], 御馬番 [MAI: 176], 御浄所監理官 [MAI: 281]
	第1パフシ	第2パフシ
	第1パフシ	宝石市場監理官 [MAI: 163], アハデイーのパフシ [MAI: 176], 御武具番 [MAI: 250], 御浄所監理官 [MAI: 297], 「下僕たち」の監理官 [MAI: 406]
	第2パフシ	砲兵隊長 [MAI: 303, 313, 330], 再上奏官 [MAI: 330], 御武具番 [MAI: 340, 349]
	第2パフシ	御武具番 [MAI: 349], 特別衛士 (bandah-hā-i čawki-i ḥāṣṣ) 監理官 [MAI: 369, 379], 砲兵隊長 [MAI: 370], ピーダル州総督 [MAI: 379], 宮内長官 [MAI: 386], 特別謁見場監理官 [MAI: 392, 404], 「下僕たち」の監理官 [MAI: 406], 御武具番 [MAI: 434], アハデイーのパフシ [MAI: 434]
	第2パフシ	ラームガル総督 (fawḡ-dār) [MAI: 234], ハーンデーンシェ州総督 [MAI: 433], 国務パフシ (baḥṣī al-mulk, 第3パフシカ?) [MAI: 472]

[AIN: 116, 606-7, 621, 1104; MAI: 85-6]。その任務の本質は、君主に対する臣下の接近を「習わし (tūzuk) に則って」[JNt: 214 / JNa: 185] 統御するところにあったと考えられる。御浄所監理官もこれと同様である。御浄所 (gusl-hānah) は元来、謁見場よりも奥向きにある君主の沐浴所であったが、これが謁見場のそれよりも限定的な謁見を行う場として用いられるようになり、君主の計量賜与という恒例の慈善儀礼も同所で行われた [MTK: 579b; AAB: 7a, 35b; JNa: 130, 166, 169; INJ: 256; BNL: i, 145; AIN: 229 & passim]。御浄所監理官は、ここへの接近を統御することがその職務であったことになる。特別謁見場監理官の職務について史料上の証拠は無いが、他二者と同様の性格を持つものと類推できる。

(c)君主への上奏を担当する職務。再上奏官(4)、諸州報告上奏官(2)、報告上奏官(1)がこれにあたる。再上奏官は勅令書を発給する過程の中で、下命の内容を君主に再確認する職務を担っていた [AIN: 1100]。現存する勅令書の裏書きによっても、再確認が文書処理の上で不可欠の手続きであったことが分かる [Shakeb 1977: 2-3, 34; Or. 11697; Or. 11698]。諸州報告上奏官は、各州に配属された事績記録官 (wāqi'ah-nawīs) からもたらされる情勢報告を君主に上奏することがその職務であったと考えられる。

これらの職務と大バフシ職の職務との間に親近性を見いだすことは容易である。(a)の職務に関しては、大バフシが軍務の統括に当たることを考えれば不思議な点はない。(b)の職務は、大バフシが衛士の一団を統括することによって、宮廷の警護を担当していたこととおそらく関係があるだろう。(c)に関しては、事績記録官が大バフシの統括下にあったことをその背景として挙げられる。さらに、宮廷外の情報と君主との接点という意味では、このような行政監察上の上奏も、文書処理上の上奏(再上奏官の職務)と同次元に属したと考えることもできる。但し、このような親近性にもかかわらず、これらの職務の経歴も、大バフシ職への任用において必要条件でなかったことには注意しなければならない。最も事例の多い御馬番職でさえ、8例を数えるにすぎないからである。

以上のとおり、同職就任者の前職には大きく4つの特徴的な職種を見いだすことができた。しかしそれらのいずれもが、同職の前職としての必要条件では

なかったことも明らかになった。したがって同職就任者の前歴は、全体としては一定の傾向を備えつつも、個々の就任者の前職歴としては、多様な内実を備えていたことになる。

3. 2. 3 大バフシ職離任後の職歴

大バフシ就任者の、離任後の職歴を整理すると表4のとおりとなる。本表も表3と同様、事項を人物ごとにまとめた上で就任の早い順に配列してある。例えば Halil Allāh Hān の場合、最初に第2バフシを退いた後、メーワート地方総督、カーブル城砦司令官を経験し、再び第2バフシを務め、これを退いた後、第1バフシに就任し、同職を退いた後、デリー州総督、パンジャーブ州総督を務めたという職歴が示されている。

なお表中【 】によって括られた部分は、大バフシ職のいずれかを経験したあと、再び大バフシ職に就任した人物が、その間に経験した職歴である。このデータは、前節に示したその人物の大バフシ職の前歴に等しく、すでに検討済みである。それゆえ先行する大バフシ職の後歴としての意味は乏しいのでここでは勘案すべきでない。またアウラングゼーブ治世後まで大バフシ職にあった2名のデータは本研究にとっては意味がないので、考察から除外した(表中「一」。これにより母数は41となる)。さらに、第1バフシ職まで務めた者と第2バフシ職で終わった者との後歴の意味は異なるので、データを区別して検討する必要がある。

表4からは次のような特徴を観察できる(以下、職名の直後に丸括弧で表示した数字は、その職を後歴として持つ者の数である)。

第1に、大バフシ職在任中に死去した者は16名にのぼり、このうちミール・バフシ職ないし第1バフシ職を経っていた者は14名である。宮廷内で貴族に殺害された Ṣalābat Hān のような不慮の死もあり得るとはいえ、大バフシ職が経歴の最後になるという類型は確かに存在し、これに従ったケースも数多かったと考えることは許されるであろう。

第2に、州総督(15)を経験した者が次いで多い。このうちミール・バフシ職ないし第1バフシ職を経っていた者は11名、さらにそのうち州総督としてその経歴

表 4 : 大バフシ職就任者の離任後の職歴

就任者名	職名	離任後の職歴
Šahbāz Hān	ミール・バフシ	アジュメメール地方統治 (職位不明) [AN: iii, 262, 268, 279, 314], 「餉の管理役」 [AN: iii, 396], 「兵士の管理と給与の決定」 [AN: iii, 404], ベンガル州バフシ [AN: iii, 511], 御陣營の警視 (kotwal-i urdu) [AN: iii, 537], マールワール州バフシ [AN: iii, 644; MT: ii, 388; TA: ii, 440]
Laskar Hān	ミール・バフシ	不明
Hwāgah Ġiyāt al-Dīn 'Alī	ミール・バフシ	パトナー造幣所の管理 [AN: iii, 227], マールワール州の軍馬烙印実施 (職位不明) [AN: iii, 264, 280]
Ġa'ar Bīg	ミール・バフシ	不明
	ミール・バフシ	不明
	ミール・バフシ	不明
Šayb Farīd	ミール・バフシ	カシュミール州総督 [AN: iii, 732], 財務長官 [AN: iii, 758; INJ: 482], ビハール州総督 [TAN: iii, 834], 財務長官 [JNT: 61 / JNa: 50]
Nizām al-Dīn Aḥmad	ミール・バフシ	グジャラート州総督 [JNT: 74, 88 / JNa: 61, 73], パンジャール州総督 [JNT: 102, 184 / JNa: 86, 159]
'Abd al-Razzāq Matmūrī	ミール・バフシ	無し (死去)
	ミール・バフシ	【タッタ州総督 [JNT: 181 / JNa: 156], デカン派遣軍 baḥsī [JNT: 375 / JNa: 330]
Wazīr al-Mulk	ミール・バフシ	マールワール州総督 [BNL: i, 75-6]
Qāḍī 'Abd al-'Azīz	ミール・バフシ	無し (死去)
Hwāgah Dūst Muḥammad	ミール・バフシ	不明
Mu'izz al-Mulk	ミール・バフシ	不明
Hwāgah Abū al-Ḥasan	ミール・バフシ	【財務長官 [JNT: 80, 115 / JNa, 66, 98] 財務長官 [JNT: 390, 393; JNa: 342, 345], カーブール州総督 [BNQ: 131b; JNT: 474 / JNa: 393; BNL: i, 120, 125], カシユミール州総督 [BNL: i, 432, 473]
Ibrāhīm Hān	ミール・バフシ	【パンジャール州総督 [JNT: 213, 308, 462-3 / JNa: 185, 272, 382-4; INJ: 177]
Šādiq Hān	ミール・バフシ	【パンジャール州総督 [JNT: 410, 436, 474 / JNa: 360, 381, 383] (JNT: 436 が Mahābat Hān とするのは校訂ミス), バフシ [INJ: 260]
	ミール・バフシ	無し (死去)
Irāḍat Hān	第1バフシ	財務長官 [BNQ: 148b; BNL: i, 186], デカン州総督 [BNQ: 190a; BNL: i, 257, 293, 309, 424], ベンガル州総督 [BNL: i, 444; ib, 83], イラーハバード州総督 [BNL: ib, 102, 105], アーグラール州総督 [BNL: ib, 105], グジャラート州総督 [BNQ: 349b; BNL: ib, 166, 281; ii, 230, 290], ビハール州総督 [BNL: ii, 605]
Islām Hān	第2バフシ	【アーグラール州総督 [BNL: i, 291, 369], グジャラート州総督 [BNL: i, 369, 396, 421, 451]
	第1バフシ	ベンガル州総督 [BNL: ib, 83, 274; ii, 103, 117, 132, 164], 財務長官 [BNL: ii, 164], デカン4州総督 [BNL: ii, 430, 679; BNW: 17a]
Mīr Ġumlah (Muḥammad Amīn)	第1バフシ	無し (死去)

Mu'tamad Hān	第2ハフシ 第1ハフシ	【第1ハフシ】 無し(死去)
Tarbiyat Hān	第2ハフシ	御馬番 [BNL: ii, 170, 187]. カシユミュール州総督 [BNL: ii, 225, 282]
Ṣalābat Hān	第2ハフシ 第1ハフシ	【第1ハフシ】 無し(死去)
Aṣālat Hān	第2ハフシ 第1ハフシ	【第1ハフシ】 無し(死去)
Ġa'far Hān	第1ハフシ	デリー州総督 [BNW: 89a, 91a]. ビハール州総督 [BNW: 109a, 156b, 176b, 239a]. 財務長官 [AS: iii, 271; AIN: 116]. マールワール州総督 [AIN: 162, 230, 419, 434, 484, 592, 634, 741, 761, 837]. 財務長官 [AIN: 837, 849-50]
Ḥafī Allāh Hān	第2ハフシ	【メーワート地方総督 (lawḡ-dār) [BNW: 14a]. カーブル城皆司令官 [BNW: 67b, 69b]
Luhrāsp Hān	第2ハフシ 第1ハフシ	【第1ハフシ】 デリー州総督 [BNW: 147b; AS: iii, 266]. パンジャーブ州総督 [AIN: 215, 574, 614, 661]
'Aqīl Hān	第2ハフシ	カーブル州総督 [BNW: 125a; AS: iii, 135; AIN: 129, 194, 229, 661]. グジャラート州総督 [AIN: 754, 1056]. カーブル州総督 [MAI: 104, 136]
Siyādat Hān	第2ハフシ	不明
I'tiqād Hān (b. Aṣaf Hān)	第1ハフシ	不明
Irādāt Hān (Mīr Ishāq)	第2ハフシ	諸州報告上奏官 [BNW: 172a]. ラクナウー地方総督 (lawḡ-dār) [BNW: 184a-b]. 諸州報告上奏官 [BNW: 216b]. アフド州総督 [AIN: 127, 202]
Dānišmand Hān	第2ハフシ 第1ハフシ	【第1ハフシ】 【デリー州総督 [AIN: 451, 464, 880, 961, 979]
Muḥammad Amīn Hān	第1ハフシ	無し(死去)
Laṣkar Hān	第2ハフシ 第2ハフシ	ラホール州総督 [AIN: 1058, 1067]. カーブル州総督 [MAI: 104, 111]. グジャラート州総督 [MAI: 121, 182, 219] 【カンダハール派遣軍ハフシ [BNW: 151a]
Asad Hān	第2ハフシ 第1ハフシ	【カシユミュール州総督 [AS: iii, 247; AIN: 195]. ムルターン州総督 [AIN: 217]. タッタ州総督 [AIN: 484, 877]. パトナ州総督 [AIN: 877, 972; MAI: 71]. ムルターン州総督 [MAI: 74, 104]
Sarbuland Hān	第2ハフシ 第1ハフシ	無し(死去) 【財務長官代理 [MAI: 103] 財務長官 [MAI: 152]
Ṣafī Hān	第2ハフシ	【第1ハフシ】 無し(死去)
'Aqīl Hān (Mīr 'Askarī)	第2ハフシ	ビハール州総督 [MAI: 226]. アウランガンバード州総督 [MAI: 243]. アーグラ一統治 (職位不明) デリー州総督 [MAI: 195, 383]

Rūh Allāh Hān	第1バフシ	【第2バフシ】
	第2バフシ	【第1バフシ】
Himmat Hān	第1バフシ	無し(死去)
	第2バフシ	【御鷹番 [MAI:120], 御淨所監理官 [MAI:132], イラーハーバード州総督 [MAI:150,153]
Asraf Hān	第1バフシ	無し(死去)
	第2バフシ	無し(死去)
Bahramand Hān	第1バフシ	【第1バフシ】
	第2バフシ	無し(死去)
Dū al-Fiqār Hān (b. Asad Hān)	第1バフシ	—
	第2バフシ	無し(死去)
Muḥliṣ Hān	第1バフシ	無し(死去)
	第2バフシ	無し(死去)
Rūh Allāh Hān (b. Rūh Allāh Hān)	第1バフシ	—
	第2バフシ	—
Sadr al-Dīn Muḥammad Hān	第1バフシ	—
	第2バフシ	—

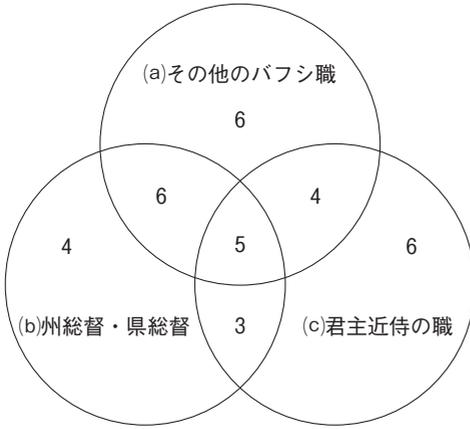
を終えた者は9名である。

第3に、財務長官職(7)を経験した者がその次に多数を占める。大バフシ職と、国制上の他部門との間に人事の厳密な区分がなかったという点は、前職の分析から導かれた特徴の第3と通底する。

以上3つの特徴的な職種によって、大バフシ職就任者のその後の経歴のパターンはほぼカバーされる。就任者たちにとって、同職は必ずしもゴールではなかったことになる。帝国国制の軍務部門における筆頭者のその後の経歴は、その前歴と同じく、このように複数のヴァリエーションがあったことを確認できる。

3.2.4 職歴の類型

以上の検討によって、大バフシ職就任者たちの職歴の中で特徴的な職種を確認することができた。そしてそのいずれもが、すべての就任者に共通する特徴ではないことが明らかになった。その上で問題にすべきは、ひとりの大バフシが経験した職歴の類型である。大バフシ就任者たちが経験した職務のこのようなばらつきは、大バフシ職に至る職歴の類型が複数あったことの反映と考えるべきであろうか。



ここで就任前の職歴に特徴的な3つの職種、すなわち(a)その他のバフシ職（経験者数21）、(b)州総督・県総督（同18）、(c)君主近侍の職（同18）を、各人が経験しているかによって集合関係を示すと、以下ようになる。

いずれか一つの職種しか経験しなかった者、いずれか二つの職種を経験した者、3つ

の職種をいずれも経験した者、いずれの類型にもほぼ等しく分布が見られる。つまり大バフシ職就任までの職歴には、いずれかの職種の系列に特化した専門性への志向を見出すことはできないし、かといってジェネラリスト的な方向性への意図も読み取りがたいということになる。

さらに、この観察から予測できることではあるが、職歴の順序にも特定のパターンを見出すことはできない。例えば Irādāt Ḥān (Mīr Ishāq) と Laṣkar Ḥān はいずれも第2バフシ就任前に儀典長、御馬番の両職を経験しているが、その順序は互いに逆である。同様に、Muḥliṣ Ḥān と Rūḥ Allāh Ḥān (b. Ruḥ Allāh Ḥān) は砲兵隊長、御武具番の両職を経験しているが、その順序は逆である。さらに Himmat Ḥān と Bahrahmand Ḥān はいずれも、第2バフシを経て第1バフシに就任しているが、御浄所監理官を、前者が第2バフシ離任後に務めているのに対し、後者は第2バフシ就任前に同職を務めている。

以上を要するに、ムガル帝国時代の大バフシ就任者の前職歴には、経験された職のヴァリエーションからも経験の順序からも、特有の職歴の類型を見出すことはできない、という結論を導ける。であるならば、彼らの離任後の職歴が一定しないことも、同様に類型の不在によって説明するのが妥当であろう。

表5：大バフシ職就任者の親族関係

	就任者名	プロフィール	有力者との関係
1	Šahbāz Ḥān	ラホール出身	
2	Laškar Ḥān	フマーユーン時代から奉職	
3	Ḥwāḡah Ġiyāt al-Dīn ‘Alī	カズウィーンから到来。兄弟はイランの宰相	
4	Ġa’far Bīg	1577年、イランから到来。(3) Ḥwāḡah Ġiyāt al-Dīn ‘Alī の兄弟の子	○
5	Šayḥ Farīd	Mūsawī サイイドの家系	
6	Niẓām al-Dīn Aḥmad	父はパープルの家政の財務官	
7	‘Abd al-Razzāq Ma’mūrī	ナジャフのサイイドの家系、父祖がインドに移住	
8	Wazīr al-Mulk	バルラース部族の「チャガタイ人」。「ティムール家に代々仕えていた」	
9	Qādī ‘Abd al-‘Aziz	ニスバ Hamadānī。ウッジヤイン出身	
10	Ḥwāḡah Dūst Muḥammad	カーブル出身	
11	Mu’izz al-Mulk	バーハルズ出身のサイイド	
12	Ḥwāḡah Abū al-Ḥasan	ニスバ Turbatī	
13	Ibrāhīm Ḥān	財務長官 I’timād al-Dawlah の「妻の兄弟」 [DhKh: i, 143; ii, 230]	○
14	Šādiq Ḥān	I’timād al-Dawlah の兄弟の子。I’timād al-Dawlah の娘を娶る	○
15	Irādāt Ḥān	サーヴェ出身のサイイド。(4) Ġa’far Bīg の義理の息子	○
16	Islām Ḥān	マシュハドのサイイドの家系。当初は君主の書記官	
17	Mīr Ġumlah (Muḥammad Amīn)	1618年、イランから到来。イスファハーンのサイイドの家系。甥はサファヴィー朝下のサドル	
18	Mu’tamad Ḥān	「あまり有名でない」イラン出身の人々の出	
19	Tarbiyat Ḥān	ジャハーンギール時代に中央アジアから到来。 Šuḡā’t Ḥān (アクバル時代) の曾孫	○
20	Šalābat Ḥān	(14) Šādiq Ḥān の子	○
21	Ašālat Ḥān	イランから到来。Mīrān Yazdī の子	
22	Ġa’far Ḥān	(14) Šādiq Ḥān の子	○
23	Ḥalīl Allāh Ḥān	イランから到来。Mīrān Yazdī の子	
24	Luhrāsp Ḥān	Mahābat Ḥān の子	○
25	‘Āqil Ḥān	Amānat Ḥān の子。Afḡal Ḥān の兄弟の子	○
26	Siyādat Ḥān	(16) Islām Ḥān の兄弟	○
27	I’tiqād Ḥān (b. Āṣaf Ḥān)	Āṣaf Ḥān (I’timād al-Dawlah の子) の子	○

28	Irādat Ḥān (Mīr Iṣḥāq)	(15) Irādat Ḥān の子	○
29	Dānišmand Ḥān	ヤズドから到来	
30	Muḥammad Amīn Ḥān	(17) Mīr Ğumlah (Muḥammad Amīn) の子	○
31	Laškar Ḥān	Zabar-dast Ḥān の子	○
32	Asad Ḥān	Dū al-Fiḡār Ḥān の子。母は (14) Ṣādiq Ḥān の娘	○
33	Sarbuland Ḥān	中央アジアから到来。バダフシャーンの王家の血筋	
34	Ṣafī Ḥān	(16) Islām Ḥān の子	○
35	‘Āqil Ḥān (Mīr ‘Askarī)	ハーフ出身	
36	Rūḡ Allāh Ḥān	(23) Ḥalīl Allāh Ḥān の子	○
37	Himmat Ḥān	Mīr Ḍiyā’ al-Dīn の子	○
38	Ašraf Ḥān	(16) Islām Ḥān の子	○
39	Bahrahmand Ḥān	(14) Ṣādiq Ḥān の孫	○
40	Dū al-Fiḡār Ḥān (b. Asad Ḥān)	(32) Asad Ḥān の子。Šāyistah Ḥān の娘を娶る	○
41	Muḡliṣ Ḥān	イランから到来。Ṣaff-šikan Ḥān の子（出世に父の関与乏しい）	
42	Rūḡ Allāh Ḥān (b. Rūḡ Allāh Ḥān)	(36) Rūḡ Allāh Ḥān の子	○
43	Ṣadr al-Dīn Muḥammad Ḥān	Mīrzā Sulṭān Ṣafawī の子	○

3.3 大バフシ職就任者たちの親族関係

本節では大バフシ就任者たちの親族関係を分析する。

各人の要目は表5に整理した。表中には各人のプロフィールを記した。同欄中、人名に先行する丸括弧と数字は、同表左欄の通番によって、表中に挙がっている就任者に該当することを示したものである。また右欄には、当該の者が帝国の有力者と親子、兄弟、ないし何らかの縁戚関係を有していた場合に「○」を付した。「有力者」の判断基準は、貴族（アミール）たり得るマンサブ（ザート数）1000以上を保有していたこと、あるいは帝国政府の要職を占めていたことである。この基準ゆえ、帝国に代々仕えた譜代の家系に属していても、「○」を付されない者もある。いずれにせよ「○」を備えない者たちは、親族の背景にかかわらず、自らが立身出世の第一世代であったことになる。

整理の結果は比較的明瞭であり、(4)Ğa‘far Big を別とすれば、(13)

Ibrāhīm Ḥān (1614年4月, ミール・バフシ職就任)以降の時期に, 有力者の縁故を備えた者たちが大バフシ職に就任する例が続出する。同人以降の31名のうち, 22名までがそのような例である。かつて Athar Ali はジャハーンギールおよびシャー・ジャハーン時代の大バフシ職就任者にイラン系の人々が優勢であることを指摘し, Anwar もこれを追認した [Athar Ali 1985; Anwar 2001: 119]。しかし表5のデータからは, その現象の本質が, 「イラン系」という実体の曖昧な集団の伸長ではなく, むしろいくつかの有力者の家系による縁故主義の卓越であったことを見いだすべきである。

さらに表の「プロフィール」欄に見られるように, 有力者の縁故の内実としては, 大バフシ職経験者の縁戚である例が顕著であることにも注意が必要である (通番4, 15, 20, 22, 26, 28, 30, 32, 34, 36, 38, 39, 40, 42の各人がそれにあたる)。もちろんバフシの親類がまたバフシになるというこの現象は, 決して血脈を通じた職能の継承と見なすべきではない。むしろ, 有力者が自らの家系の存続を図るために, もっぱら大バフシ職という装置を用いたことを反映していると考えべきである。

このような縁故主義は, 当人たちの昇進にも作用していた形跡を認めることができる。第2バフシ職が設けられたシャー・ジャハーン時代以降, 同職を経ずに第1バフシ職に就いた者は, その当初から第1バフシ職にあった Irādāt Ḥān を除けば7名いる。そしてそのうち, 実に6名までが有力者の子弟であった ((22) Ġa'far Ḥān, (24) Luhrāsp Ḥān, (27) I'tiqād Ḥān, (28) Muḥammad Amīn Ḥān, (38) Ašraf Ḥān, (40) Dū al-Fiqār Ḥān)。このような経歴の跳躍は, 有力者の縁故によってこそ可能であったと考えるべきである。要するにこの現象には, 有力者の子弟や縁戚者のプロモーションの通路として大バフシ職が用いられたという側面を見出せるのである。

但し大バフシ職のそのような側面のみを強調するわけにはいかない。職務上の実績の善し悪しは, 縁故者といえども考課の対象たり得たことに注意すべきである。第2バフシ Laškar Ḥān は1655年, 汚職の廉で同職を免じられ, マンサブ500ザート削減の処分を受けた [BNW: 213a]。また後に第2バフシ職に就任する Ṣafi Ḥān はその前歴において, デカン諸州政府のバフシ職をつとめて

表 6 : 財務長官職就任者の親族関係

	就任者名	有力者の子弟・縁戚	大バフシ職の前歴
1	Muẓaffar Ḥān		
2	Ḥwāḡah Šāh Maṣṣūr Šīrāzī		
3	Rāḡah Todar Mal		
4	Wazīr Ḥān (‘Abd al-Maḡīd Āṣaf Ḥān の兄弟)	○	
5	Qilīc Ḥān		
6	Ḥwāḡah Šams al-Dīn Ḥwāfī		
7	Rāy Patar Dās		
8	Ġa’far Bīg	○	○
9	Wazīr Ḥān (Muqīm)		
10	Wazīr al-Mulk		
11	Šarīf Ḥān		
12	I’timād al-Dawlah		
13	Ḥwāḡah Abū al-Ḥasan		○
14	Wazīr Ḥān (‘Alīm al-Dīn)		
15	Irādāt Ḥān ((8) Ġa’far Bīg の義理の息子)	○	○
16	Afḡal Ḥān		
17	Islām Ḥān		○
18	Ġa’far Ḥān	○	○
19	Sa’d Allāh Ḥān		
20	Mīr Ġumlah (Muḥammad Sa’īd)		
21	Rāy Raghunāth		
22	Fāḡīl Ḥān		
23	Asad Ḥān	○	○

いたが、その職務を十分に果たすことができなかつたため、首府に召還され、マンサブを削減され、ḥān の称号も一時召し上げられた [BNW: 229b]。大バフシ職は貴公子の気楽な名誉職では決してなかつたのである。

さらに、大バフシ職就任に至るまでの前歴についても、縁戚者特有のパターンを見いだすことはできない。確固たる特定のキャリア・パターンを見いだせないという点では、有力者の子弟・縁戚も、しからざる者たちと同様である。そして彼らとて、たたき上げの者たちと同様、前節に見いだされたもろもろの職を経験せねばならなかつた。たしかに上に示した第2バフシ職歴の跳躍のように、貴顕の係累として生まれたという「前歴」は彼らにとって有利に働きはした。しかしその前歴はかなり重要ではあるものの、他の前歴と同様、複数あ

る条件の一つでしかなかったのである。

このような特徴が大バフシ職にのみ当てはまるのか否かを検討するため、アクバル時代1573年以降アウラングゼーブの死去（1707年）までに、財務長官職に就任した者たちについて同様の調査を行うと表6が導かれる。財務長官職に関して筆者は、本論と同様の調査を予定しているので、ここでは任期の考証や典拠等の詳細は省略してある。

表のデータは、有力者との子弟・縁戚関係の有無について、大バフシ職と鮮やかな対照を示している。すなわち、そのような特性を有していた財務長官職経験者は、23名中わずか5名しかいないのである。しかもそのうち(4) Wazīr Ḥān については、根拠が薄弱である。判断の根拠は、兄弟 ‘Abd al-Mağīd Āṣaf Ḥān が、Humāyūn 時代からアクバル時代初期にかけての宰相であったことによるのであるが、1568年の記事 [AN: ii, 324] を最後に史料から姿を消すこの兄弟との縁故が、1580年に生じた彼の財務長官就任 [MT: ii, 288; AN: iii, 316] に作用したかどうかは疑わしいからである。

この事実には、縁故主義の対極としての能力主義を読み取ることができるかどうかは、今のところ判断を下すだけの十分な材料がない。いずれにせよ、大バフシ職とはことなる人材運用の原理がそこに働いていたこと、そしてその原理によって財務長官職に任用された人々が多くの場合、自らの一代で（たとえ零細な譜代の出身ではあったとしても）出世を果たしていたことは確実に見いだせよう。したがって大バフシ職を経て財務官職に就いた6名は、大バフシ職のキャリア・パターンの結果として同職に任じられたのではないことになる。この6名のうち4名が有力者の縁故者であったとしても、財務長官職への任用に作用したのは、その「前歴」とは別の条件だったのである。

さらに、ここから敷衍できる事柄であるが、財務長官の縁戚者が財務長官に就いた例は(15) Irādāt Ḥān しかないことの意味も大きい。しかもこれはシャー・ジャハーンが即位したときのことで、政権成立の立役者 Āṣaf Ḥān の請願によってこれが成るといふ、きわめて異例の出来事なのである [BNL: i, 186]。これを極端な例外とすれば、財務長官職は有力者筋のプロモーションの通路ではあり得なかったし、まして、財務長官職を輩出する家系などは存在し得な

ったと考えることができる。財務長官職を経験し、息女 Nūr Ğahān をジャハーンギールの妻とした大物中の大物 I'timād al-Dawlah の一族・縁者たちでさえ、経歴の通路として大バフシ職を用いた事実はこのことをよく表している (Ibrāhīm Ḥān, Ṣādiq Ḥān, Ṣalābat Ḥān, Ğa 'far Ḥān, I 'tiqād Ḥān, Bahrahmand Ḥān がこれにあたる⁽¹⁴⁾)。

さて、大バフシ職と国制上の他部門との間に人事の障壁がなかったという観察はすでに述べたとおりである。その内容は、宮内長官職がもっぱら大バフシ職の前歴の一つとして用いられたということ、および、財務長官職をその前歴として経験した2例が例外的なものであったこと、それゆえ、財務長官職への就任は大バフシ職のもっぱら後歴と見なせること、であった。この観察に従うならば、大バフシ職を含めた3部門の人事の流動性は、宮内から軍務へ、および軍務から財務へ、という非対称的なものであったことになる。そして、職歴を積むとともに人士の地位が上昇していく一般原則に従うならば、宮内に対する軍務の、および軍務に対する財務の、人材運用上の優越性がそこに浮かび上がってくる。

このような人事のあり方が、おそらく部門そのものの序列を反映していたことは、勅令書の作成手順の中に読み取ることができる。詳細な検討は別の機会に譲るが、大バフシの職務の一つであるジャーギール発給の勅令書の処理には、複数の段階で財務長官の関与を必要としたことが、現存する勅令書裏面に記入された由来書きと担当官の署名・捺印によって確認できる⁽¹⁵⁾。このような財務長官の関与は、宗務長官が管轄する免租地発給の勅令書においても同様であり⁽¹⁶⁾、軍務、宗務の両部門に対する財務の優越をうかがわせる有力な材料である。

(14) I'timād al-Dawlah の一族については [Habib 1969] によって、ほぼ網羅的な情報を得ることができる。

(15) シャー・ジャハーン時代1632年発行の勅令書 [Shakeb 1977: 2-5, plates nos. 1-2]。この勅令書についての紹介は [近藤 2003: 337-339]。

(16) シャー・ジャハーン時代1629年発行の勅令書 [Or. 11697]。アウラングゼーブ時代1691年発行の勅令書 [Or. 11698]。但し後者においては、財務長官の代理として大バフシが決裁している。

もちろん年代記史料からは、財務、軍務、宮内、宗務の4部門を序列づける発想を読み取ることはできない。むしろ国制上不可欠の要素として、各々の重要性を並置して記述する〔AA: i, 3-5〕。それゆえ、人材の運用に反映されたこのような序列は、理念上は整然と配列され記述されていた国制の実態面であったと考えるのが妥当であろう。

おわりに

本論で得られた知見は以下のとおりである。

(1)大バフシ職就任者の任期は一定していない。(2)同職就任時のマンサブ値は一定していない。すなわち同職就任とマンサブとの間に、相関関係を見出すことはできない。しかし第1バフシと第2バフシとの相対的序列はマンサブによって維持されていた。(3)同職就任者の前職歴としては、その他のバフシ職、州・県総督職、君主近侍の諸職の3つの職種が主流である。(4)大バフシを経歴の最後とする就任者が多い一方、州総督ないし財務長官として転出する例もある。(5)大バフシ職就任者に特徴的な職種はあるものの、特有のキャリア・パターンは見られない。(6)大バフシ職には有力者の子弟・縁戚者の昇進の通路としての機能があった。この点は、財務長官職と大きく異なる。(7)大バフシ職は人事の序列においては、宮内長官職に優位し、財務長官職の下位にあった。このことはおそらく国制の業務上の序列と並行している。

以上の知見を踏まえて、次の見通しが得られる。大バフシの職務の一つが君主と外界との接触を統御することであったことはすでに述べた。それによって同職が帯びていた君主との特別な近しさは、国制の実務上の序列とは別種類の格を与えたはずである。マンサブ制度にかかわる文書行政の担い手という機能を財務長官職と共有しながら、低い序列に甘んじた大バフシ職が、前者に吸収されることも、国制の網目に埋没することもなく、全時代を通じて存在感を示し続けた真の理由はその格にあるのではなからうか。実務上の劣位は格式の優位によって補われていた。そう考えれば、有力者の子弟たちが数多く任用された理由は合理的に説明できる。もちろんしからざる者たちも就任者に数多くいたことは、君主への近い距離が縁故以外の要因によっても得られたことを意

味している。このことはムガル帝国の国制における人材の運用が、幅広く門戸を開いていたことの証拠かもしれないが、この種の全般的な判断は、帝国国制の他の諸職における人材運用の実態を踏まえて下されねばならない。

そのためには、大バフシ職の職歴に見える職種の変異やキャリア・パターンの不在といった特徴が、財務長官職、宮内長官職、宗務長官職といった他の諸職においてはいかなる様相を呈するのかを検討するため、各々の職の運用における人的要因をそれぞれ分析する必要がある。ムガル帝国国制の実態はそれらの作業によって、より明確な像を結ぶはずである。

参考文献

一次資料

- AA : Abū al-Faḍl, (*Ā'īn-i Akbarī*). H. Buluḥman (Blochmann) (ed.), 2 vols., Kalkatah, 1867-1877 [Reprint: Frankfurt am Main, 1993].
- AAB : Asad Bīg Qazwīnī, (*Aḥwāl-i Asad Bīg*). Andhra Pradesh Government Oriental Manuscripts Library, ms. Fann-i Sawānīḥ-i 'Umrī 41.
- Add. 6599 ii : Anonym, (*Dastūr al-'Amal*). British Library, ms. Add. 6599 ii.
- AIN : Muḥammad Kāẓim, (*Ālamgīr Nāmah*). Mawlawī Ḥādīm Ḥusayn & Mawlawī 'Abd al-Ḥayy (eds.), 2 vols., Kalkatah, 1865-1868.
- AN : Abū al-Faḍl, *Akbar Nāmah*. Mawlawī Āgā Aḥmad 'Alī & Mawlawī 'Abd al-Raḥīm (eds.), 3 vols. Kalkatah, 1877-1868.
- AS : Muḥammad Ṣāliḥ Kanbo, (*Amal-i Ṣāliḥ*). Gulām Yazdānī (ed.), 3 vols., Kalkatah, 1914-1939.
- BG : Mīrzā Nathan Iṣfahānī, (*Bahāristān-i Ġaybī*). Bibliothèque Nationale de France, ms. Supplément persan 252.
- BNL : 'Abd al-Ḥamīd Lāhawrī, (*Bādšāh Nāmah*). Mawlawī Kabīr al-Dīn Aḥmad & Mawlawī 'Abd al-Raḥīm (eds.), 2 vols., Kalkatah, 1866-1868.
- BNQ : Muḥammad Amīn Qazwīnī, (*Bādšāh Nāmah*). British Library, ms. Or. 173.
- BNW : Muḥammad Wārīḥ, (*Bādšāh Nāmah*). British Library, ms. IO Islamic 324.
- DA : Anonym, (*Ḍawābiḥ-i 'Ālamgīrī*). British Library, ms. Add. 6598 ii.
- DhKh : Farīd Bhakkarī, (*Ḍaḥīrat al-Ḥawānīn*). Syed Moinul Haq (ed.), 3 vols., Karachi, 1961-1974.
- GI : Muḥammad Qāsim Fīrīštāh, (*Gulšan-i Ibrāhīmī*). J. Briggs & Mīr Ḥayrāt 'Alī Ḥān Muṣṭāq (eds.), 2 vols., Munba'ī & Pūnah, 1832.
- INJ : Mu'tamad Ḥān, (*Iqbāl Nāmah-i Ġahāngīrī*). Mawlawī 'Abd al-Ḥayy & Mawlawī

- Aḥmad ‘Alī (eds.), Calcutta, 1865.
- INJ(L) : do., Lakhna’ū, 1870.
- JNa : Nūr al-Dīn Muḥammad Ğahāngīr, *Ğahāngīr Nāmah*. Syud Ahmud Khan (ed.), Ghazeepore & Ally Gurh, 1863–1864.
- JNt : do., Muḥammad Hāšim (ed.), [Tihirān], 1359 Sh.
- MAI : Muḥammad Sāqī, *Ma’āṭir-i ‘Ālamgīrī*. Āġā Aḥmad ‘Alī (ed.), Kalkatah, 1870–1873.
- ML : Ḥāfi Ḥān, *Muntaḥab al-Lubāb*. Kabīr al-Dīn Aḥmad (ed.), 3 vols., Kalkatah, 1860–1925.
- MT : ‘Abd al-Qādir Badā’unī, *Mutaḥab al-Tawārīḫ*. Mawlawī Aḥmad ‘Alī & Kabīr al-Dīn Aḥmad (eds.), 2 vols., Kalkatah, 1864–1869.
- MTK : Ḥasan Ḥākī Šīrāzī, *Mutaḥab al-Tawārīḫ*. British Library, ms. Or. 1649.
- Or. 11697 : British Library, ms. Or. 11697.
- Or. 11698 : British Library, ms. Or. 11698.
- SD : (Surat Documents), Bibliothèque Nationale de France, ms. Supplément persan 482.
- TA : Niẓām al-Dīn Aḥmad, *Ṭabaqāt-i Akbarī*. B. De & Muḥammad Hidāyat Ḥusayn (eds.), Kalkatah, 1913–1941.
- TAlf : Aḥmad Tattawī et al., *Tārīḫ-i Alfī*. Sayyid ‘Alī Āli Dāwud (ed.), Tihirān, 1378 Sh.
- TAK : Muḥammad ‘Ārif Qandaharī, *Tārīḫ-i Akbarī*. Sayyid Mu’in al-Dīn Nadwī, Sayyid Aẓhar ‘Alī Dihlawī & Imtiyāz ‘Alī ‘Aršī (eds.), Rāmpūr, 1962.
- WAI : ‘Āqil Ḥān Rāzī, *Wāqī‘āt-i ‘Ālamgīrī*. Ḥāġġī Zafar Ḥasan (ed.), Dihlī, 1945.

二次資料

- Alam 1986 : Alam, M. *The crisis of Empire in Mughal North India: Awadh and the Punjab*, Delhi.
- Alam & Subrahmanyam 1998 : Alam, M. & Subrahmanyam, S. (eds.), *The Mughal state, 1526-1750*, Delhi.
- Alavi 2003 : Alavi, S. (ed.), *The eighteenth century in India*, Delhi.
- Ando 1992 : Ando, S. *Timuridische Emire nach dem Mu‘izz al-ansāb: Untersuchung zur Stammesaristokratie Zentralasiens im 14. und 15. Jahrhundert*, Berlin.
- Anwar 2001 : Anwar, F. *Nobility under the Mughals, 1628-1658*, New Delhi.
- Athar Ali 1966 : Athar Ali, M. *The Mughal nobility under Aurangzeb*, London.
- Athar Ali 1985 : Athar Ali, M. *The Apparatus of empire: Awards of ranks, offices and titles to the Mughal nobility (1574-1658)*, Delhi.

- Athar Ali 1986/7 : Athar Ali, M. 'Recent theories of the Indian eighteenth century', *Indian Historical Review*, 13, pp. 102-110.
- Athar Ali 1993 : Athar Ali, M. 'The Mughal polity: A critique of revisionist approaches', *Modern Asian Studies*, 27-4, pp. 699-710.
- Athar Ali 1997 : Athar Ali, M. *The Mughal nobility under Aurangzeb* (Revised edition), Delhi.
- Barnett 1999 : Barnett, R. (ed.), *Rethinking eighteenth century India*, New Delhi.
- Bayly 1983 : Bayly, C. A. *Rulers, townsmen and bazaars: North Indian society in the age of British expansion, 1770-1870*, Cambridge.
- Chandra 1982 : Chandra, S. *Medieval India: Society, the Jagirdari crisis and the village*, Delhi.
- Esin 1970 : Esin, E. 'The Turkish Bağış and the painter Muḥammad Siyāh Kalam', *Acta Orientalia*, 32, pp. 81-114.
- Esin 1979 : Esin, E. 'The Bakhshi in the 14th to 16th centuries: The master of the pre-Muslim tradition of the art of the book in Central Asia', Basil Gray (ed.), *The arts of the book in Central Asia*, Paris & London, pp. 281-294.
- Habib 1963 : Habib, I. *The agrarian system of Mughal India (1556-1707)*, London.
- Habib 1969 : Habib, I. 'The family of Nur Jahan during Jahangir's reign', *Medieval India, a miscellany*, 1, pp. 74-95.
- Hintze 1997 : Hintze, A. *The Mughal empire and its decline: An interpretation of the sources of social power*, Aldershot.
- Husain 1999 : Husain, A. *The nobility under Akbar and Jahāngīr: A study of family groups*, New Delhi.
- Ibn Hasan 1936 : Ibn Hasan, *The central structure of the Mughal empire*, Oxford.
- Köplülü 1942 : Köplülü, M. F. 'Bahşi', *İslām Ansiklopedisi*, vol. 2, İstanbul, pp. 233-239 (Reprint: 1979).
- Marshall 1987 : Marshall, P. J. *The new Cambridge history of India. II. 2: Bengal: The British bridgehead - Eastern India, 1740-1828*, Cambridge.
- Marshall 2003 : Marshall, P. J. *The eighteenth century in Indian history: Evolution and revolution*, New Delhi.
- Melville 2006 : Melville, C. 'The Keshig in Iran: The survival of the royal Mongol household', Linda Komaroff (ed.), *Beyond the legacy of Genghis Khan*, Leiden/Boston, pp. 135-164.
- Moosvi 1985 : Moosvi, S. 'Scarcities, prices and exportation: The Agrarian crisis, 1658-70', *Studies in History, New Series*, 1-1, New Delhi, pp. 45-55.
- Moosvi 1987 : Moosvi, S. *The economy of the Mughal Empire c. 1595: A statistical study*, Delhi.

- Perlin 1983 : Perlin, F. 'Proto-industrialization and pre-colonial South Asia', *Past and Present*, 98, pp. 30-95.
- Perlin 1985 : Perlin, F. 'State formation reconsidered: Part two', *Modern Asian Studies*, 19-3, pp. 415-480.
- Qureshi 1973 : Qureshi, I. H. *The administration of the Mughul empire*, Patna (Reprint: Delhi, 1990).
- Richards 1975 : Richards, J. F. *Mughal administration in Golconda*, Oxford.
- Richards 1986 : Richards, J. F. *Document forms of official orders of appointment in the Mughal Empire*, Cambridge.
- Saran 1973 : Saran, P. *The provincial government of the Mughals 1526-1658*, 2nd edition, Bombay.
- Sarkar 1920 : Sarkar, J. *Mughal administration: Six Lectures*, Patna.
- Sarkar 1984 : Sarkar, J. N. *Mughal polity*, Delhi.
- Shakeb 1977 : Shakeb, M. Z. A. *Mughal archives: A descriptive catalogue of the documents pertaining to the reign of Shah Jahan (1628-1658)*, Hyderabad.
- Siddiqi 1961 : Siddiqi, N. A. 'The Faujdar and Faujdari under the Mughals', *Medieval India Quarterly*, 4, pp. 22-35.
- Subrahmanyam & Bayly 1988 : Subrahmanyam, S. & Bayly, C. A. 'Portfolio capitalists and the political economy of Early Modern India', *Indian Economic and Social History Review*, 25-4, pp. 401-424.
- Subrahmanyam 1992 : Subrahmanyam, S. 'The Mughal state - Structure or process? Reflections on recent Western historiography', *Indian Economic and Social History Review*, 29-3, pp. 291-321.
- Washbrook 1988 : Washbrook, D. A. 'Progress and problems: South Asian economic and social history c. 1720-1860', *Modern Asian Studies*, 22-1, pp. 57-96.
- Wink 1986 : Wink, A. *Land and sovereignty in India: Agrarian society and politics under the eighteenth century Maratha Svarajya*, Cambridge.
- 小名 1985 : 小名康之「ムガル帝国の支配体制：マンサブダーリー制」『中世史講座 4 中世の法と権力』学生社, pp. 53-79.
- 久保 1997 : 久保一之「ティムール朝とその後：ティムール朝の政府・宮廷と中央アジアの輝き」『岩波講座 世界歴史11 中央ユーラシアの統合 9-16世紀』岩波書店, pp. 147-176.
- 近藤 2003 : 近藤治『ムガル朝インド史の研究』京都大学学術出版会.
- 中里 1999 : 中里成章「インドの植民地化問題・再考」『岩波講座 世界歴史23 アジアとヨーロッパ』岩波書店, pp. 155-179.
- 長島 2000 : 長島弘「インド洋とインド商人」『岩波講座 世界歴史14 イスラーム・環インド洋世界16-18世紀』岩波書店, pp. 235-256.

- 水島 2006：水島司「インド近世をどう理解するか」『歴史学研究』821, pp. 49-59, 74.
宮 2012：宮紀子「Mongol baqši と bičikči たち」窪田順平編『ユーラシアの東西を眺める：歴史学と環境学の間』総合地球環境学研究所, pp. 37-64.

[付記] 本稿校正中に、久保一之「ミール・アリーシールとウイグルのバフシ」『西南アジア研究』77, 2012, pp. 39-73が刊行された。

2012) and the resistance of the Turkmen headed by Mahmud Khan Atal'khanov. Thus in the period prior to the Russian Revolution, the introduction of modern motor irrigation equipment and the establishment of a plantation with the aim of cultivating and exporting commercial crops in the territory of the Khanate of Khiva at the lower basin of the Amu Darya river basin was never realized.

**ON THE OFFICE OF *BAḤŠĪ* IN THE MUGHAL EMPIRE:
THE PERSONAL FACTORS OF THE OPERATION
OF THE OFFICE OF *BAḤŠĪ-ĀN-I 'IZĀM***

MASHITA Hiroyuki

Many aspects of the state system of the Mughal empire remain obscure. The aim of this article is to clarify the actual operation of the office of *baḥšī*, which shouldered military administration in the state system, and particularly those of the *baḥšī-ān-i 'izām* who occupied its leading position in the central government. This task has great significance in considering the operation of the personnel system known as the *manṣab* system and the aristocracy of the empire. This article focuses on the period from the introduction of the *manṣab* system in 1573/4 to the death of Awrangzīb as well as confirming the position of the *baḥšī-ān-i 'izām* in the state system by surveying the office of *baḥšī* in general throughout the Mughal empire, and by indicating the evidence to create a list of the holders of the offices thereby analyzes the personal factors of the operation of this office such as the title holder's *manṣab*, official career, and familial relations.

The following knowledge has attained through this analysis. First, the term of the *baḥšī-ān-i 'izām* was indeterminate. Second, the *manṣab* rank on the appointment was also indeterminate. In other words, a correlation between this office and the *manṣab* cannot be confirmed. However, the interrelated order between the first *baḥšī* and the second *baḥšī* was sustained by the *manṣab* rank. Third, as for the prior positions of the holders of this office, they were chiefly of three types: other *baḥšīs*, governors of provinces or districts, and entourage of the emperor. Fourth, many ended their careers in the office of *baḥšī-ān-i 'izām*, but some were transferred to the offices of governor of a province or the minister of finance. Fifth, although the holders of the office of *baḥšī-ān-i 'izām* had characteristic

offices antecedent to their appointment, no specific career pattern could be discerned. Sixth, reaching the office of *baḥşī-ān-i ‘izām* functioned as a path of advancement for the close relatives of influential figures. This point differs greatly from the case of the minister of finance. Seventh, in terms of the order of appointment, *baḥşī-ān-i ‘izām* had precedence over the minister of the imperial household and was subordinate to the minister of finance. This likely paralleled the order of responsibilities within the state system.

**FROM THE YÖRÜK IN RUMELI TO THE DESCENDANTS
OF THE CONQUERORS: THE ESTABLISHMENT AND
DEVELOPMENT OF THE SEMI-WARRIOR STATUS
OF THE “NOMADIC PEOPLE”
IN THE OTTOMAN EMPIRE**

IWAMOTO Keiko

After the subjugation of the Balkan Peninsula by the Ottoman Empire, many people crossed from Anatolia to the Balkan Peninsula, which was named *Ruméli*. From Western Anatolia, Turkish nomadic people called *yörük* emigrated and settled in various locations, forming tribal groups. Based on the *yörük* in *Ruméli*, the group known as the descendants of the conquerors (*Evlād-ı Fātihān*) was created in the late 17th century.

In this article, I employ source materials such as tax registers (*taḫvīr defteri*), legal codes (*ḳānūn-nāme*) and registers of imperial edicts (*mühimme defteri*) to study the role played by the *yörük* in *Ruméli* in the Ottoman society, the kind of relationship they built with the central government, and the reason why the descendants of the conquerors was created among the *yörük* in *Ruméli*.

In the 16th century, in exchange for a partial tax exemption, the *yörük* in *Ruméli* participated in battles as soldiers in time of war and engaged in various kinds of non-combatant labor in times of peace. The central government and the *yörük* in *Ruméli* were often at odds over the duty to serve the military or in various types of labor service, but because the *yörük* in *Ruméli* were an important source of labor during times of war and peace, the central government never dis-